

209

289-Su968ㄗ



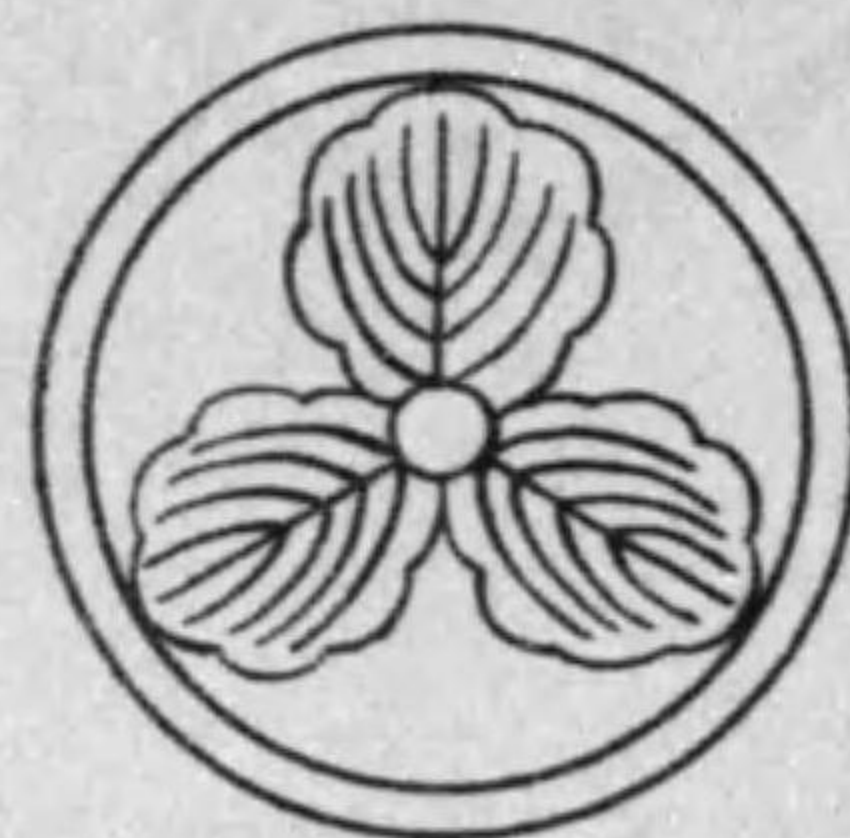
1200500732470



始



納本

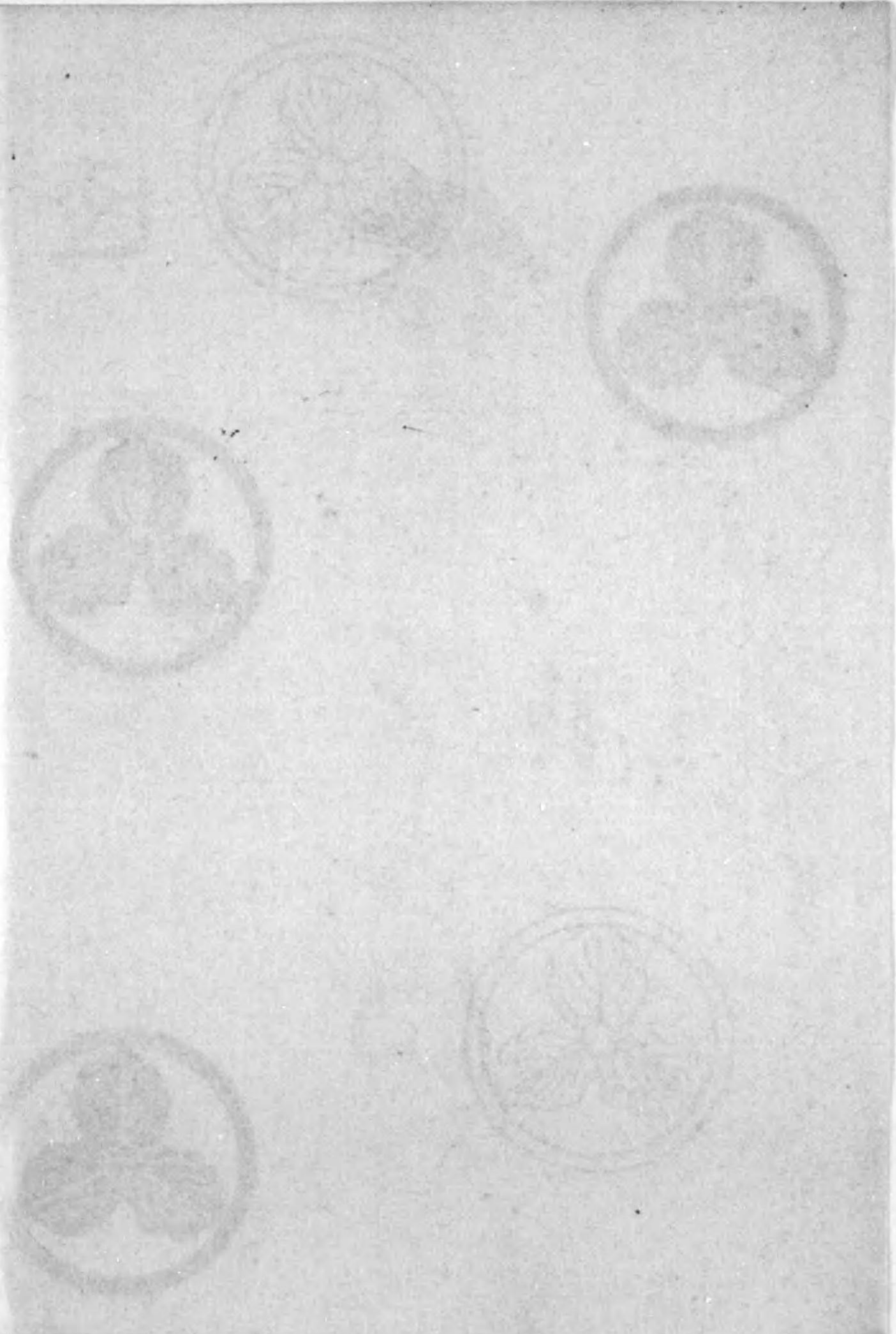


289
S6968



筆與平友仿

款



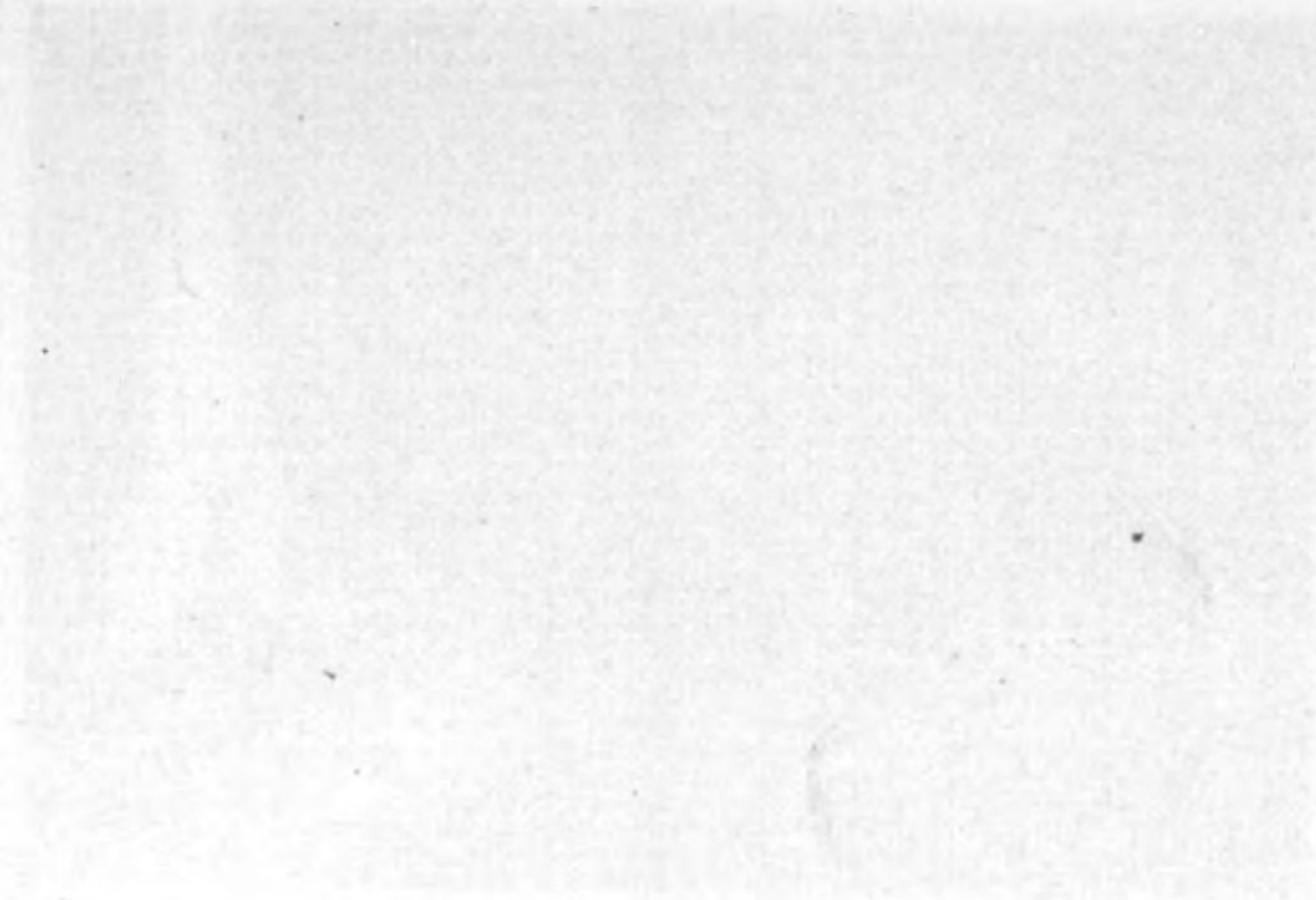


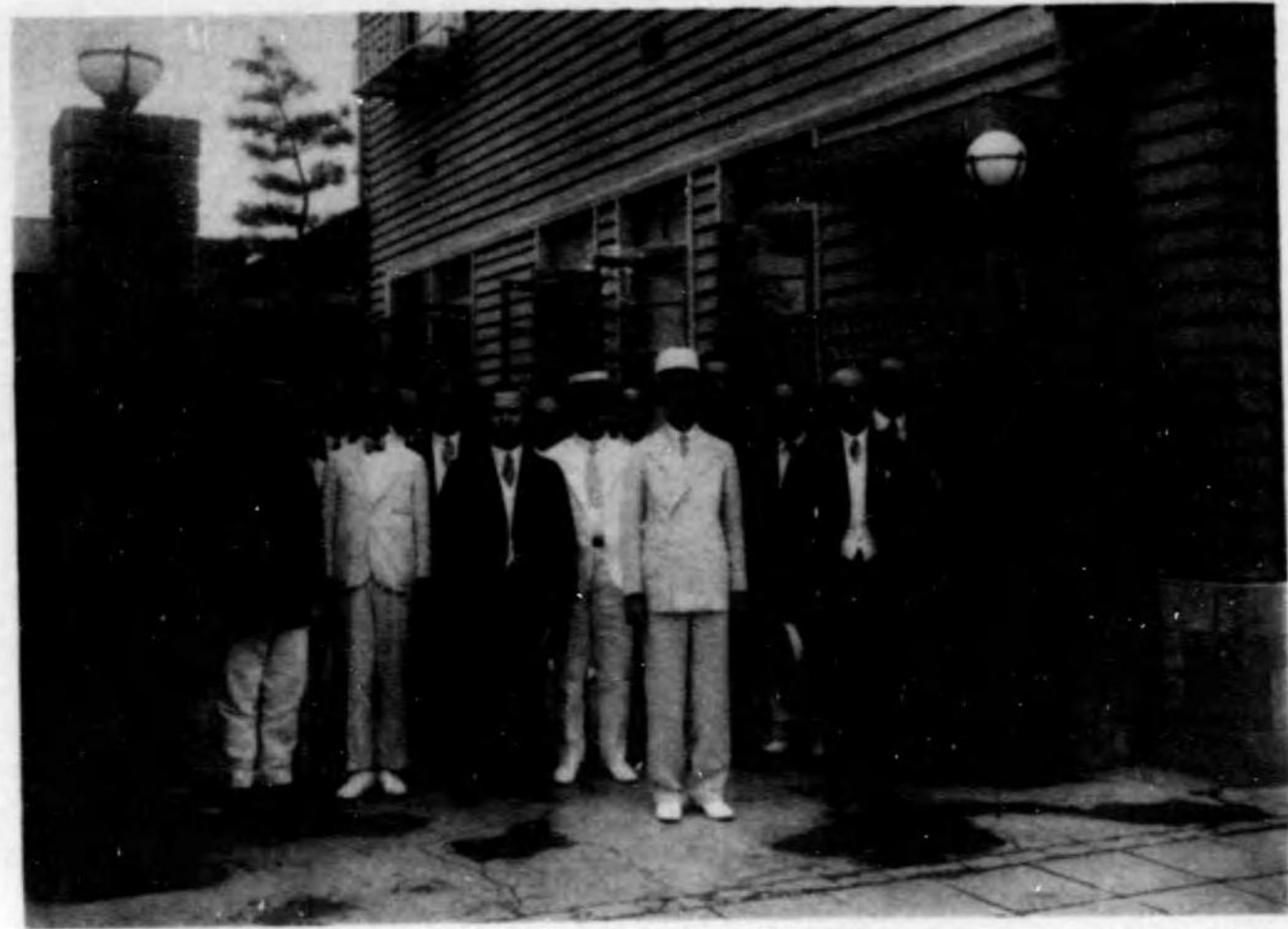
し浴に榮光の察視御 下殿兩妃同王親仁雍宮父秩
長社社會品食水清木鈴るぐ上申を明説御品製
(日六十二月一年二十和昭)





下殿兩妃同王親仁雍宮父秩
ふ賜を榮光の察視御場工社會式株品食水清
(日六十二月一年二十和昭)

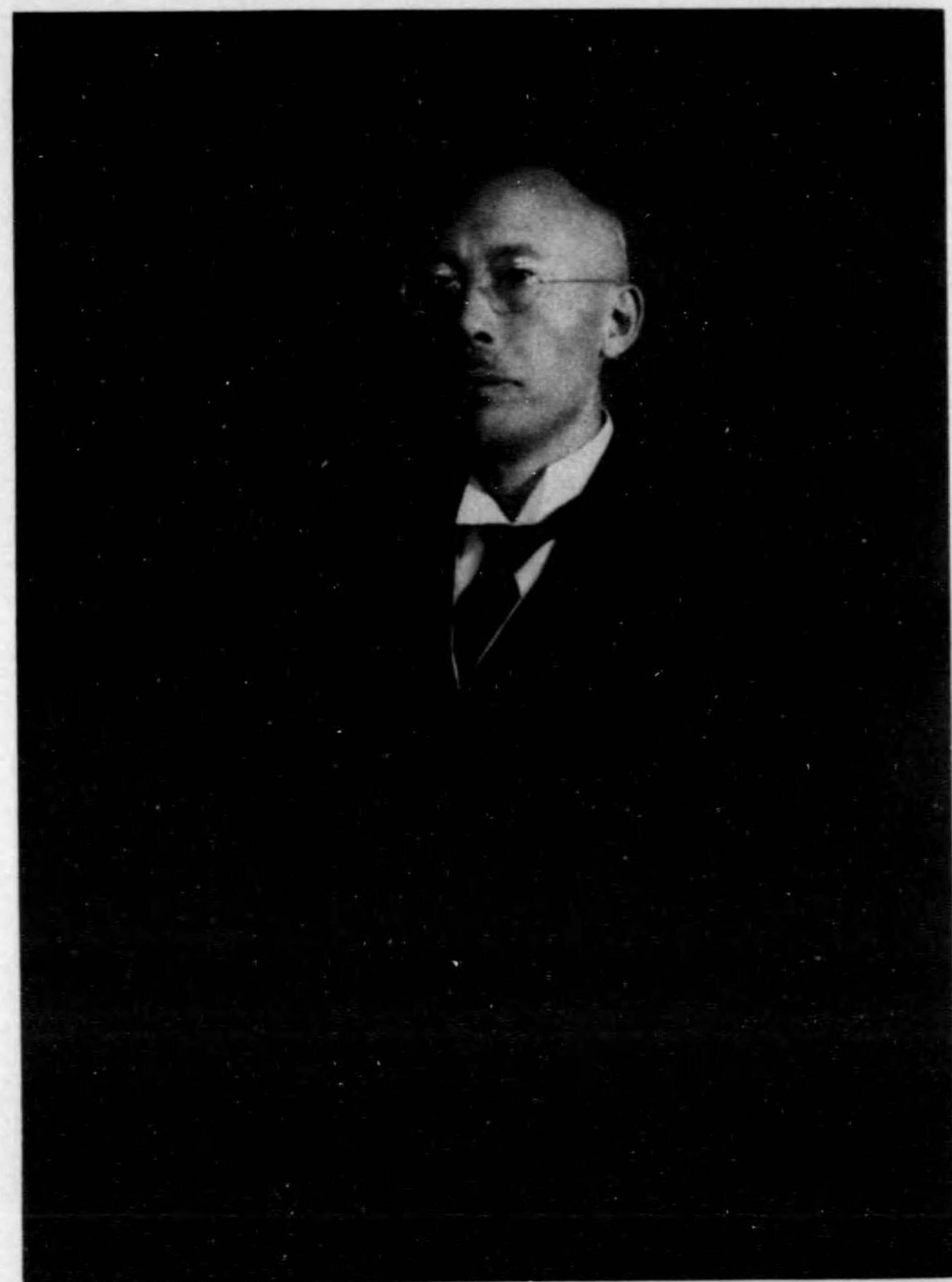




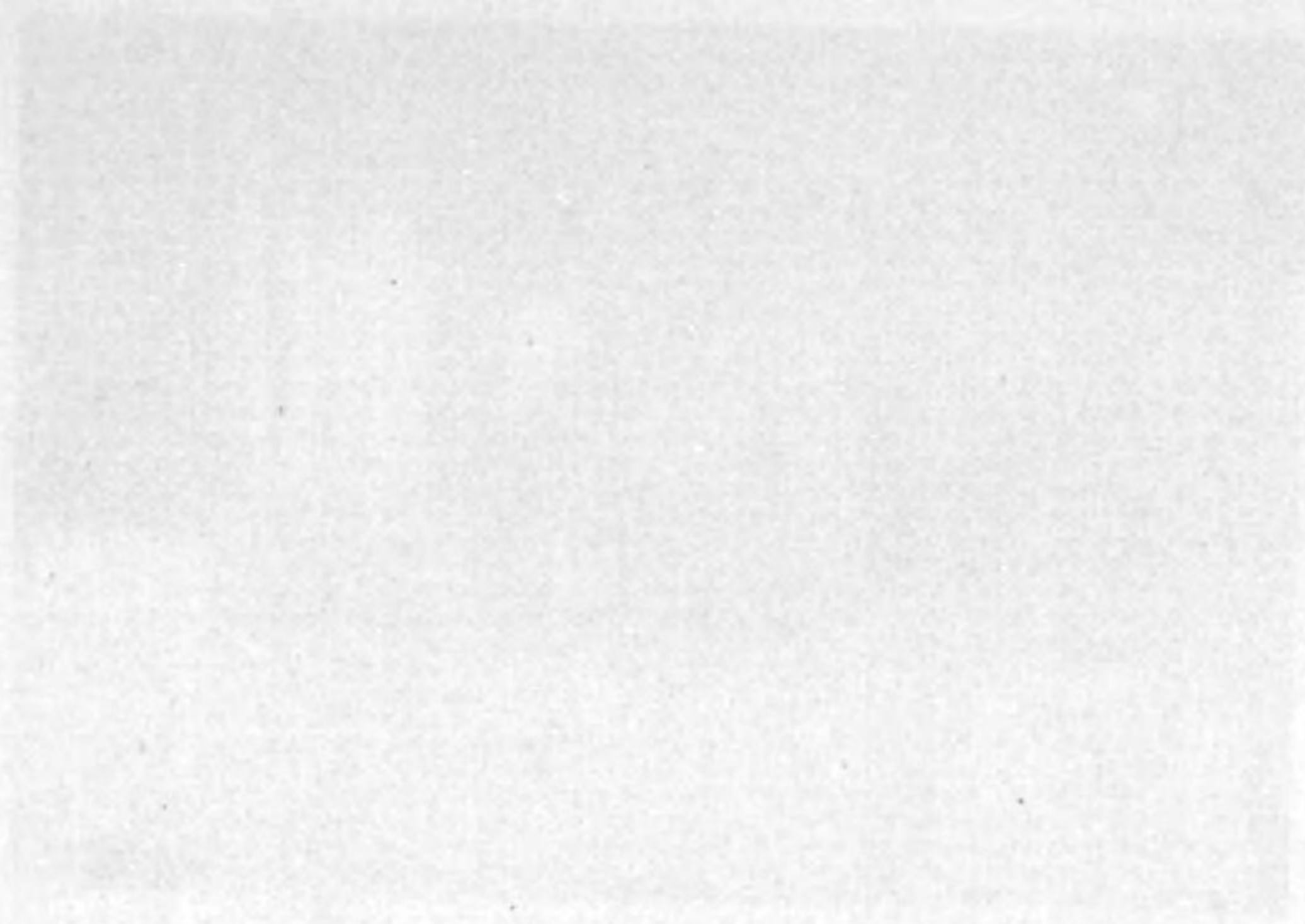
久 邇 宮 朝 融 王 殿 下
清水食品株式會社御視察の榮光を賜ふ
(昭和九年八月二十三日)



久邇宮朝融殿下
清水食品株式会社工場御視察の榮光賜ふ
(昭和三十三年六月八日)



影近氏平與木鈴

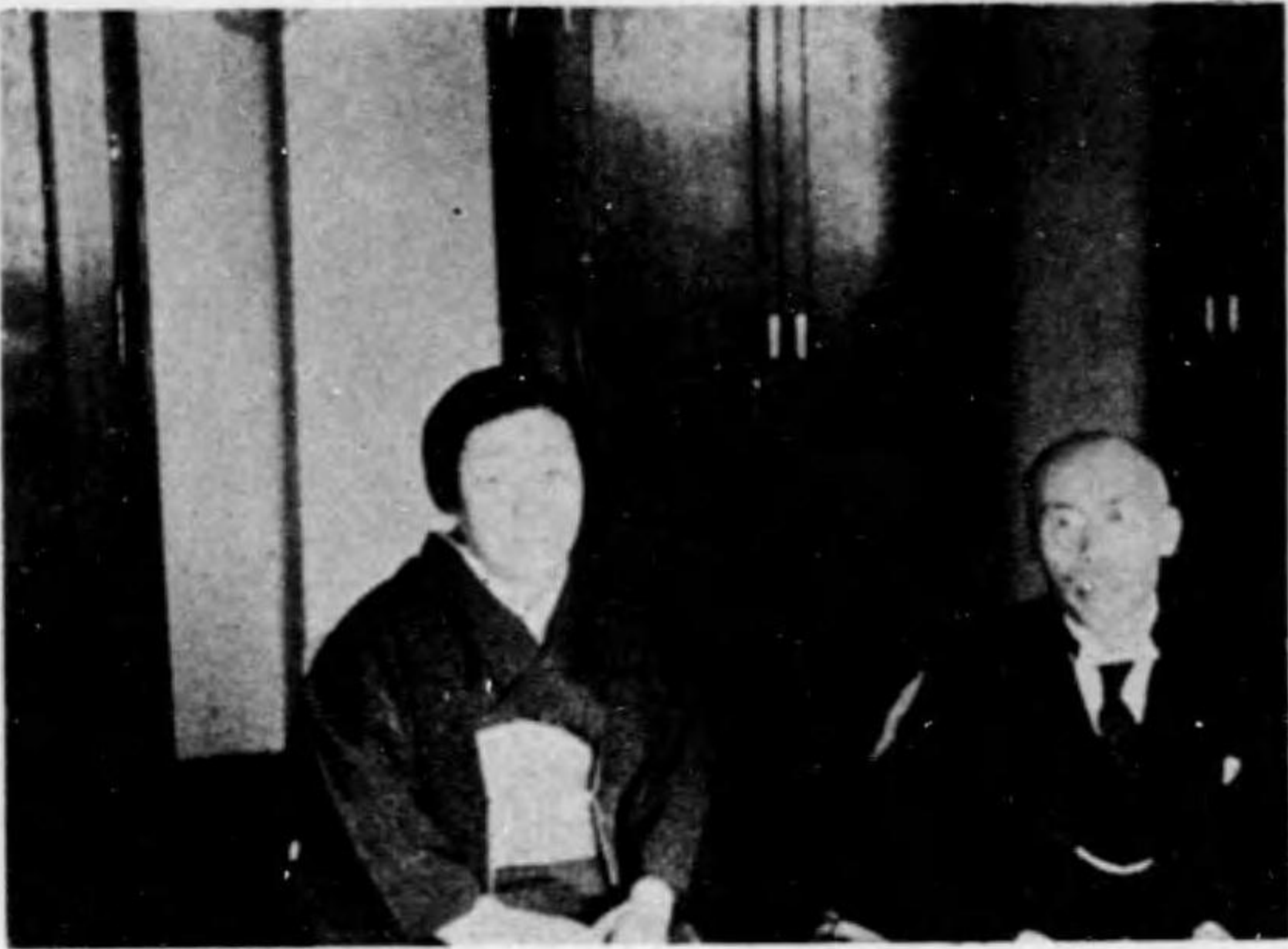


Faint, illegible text or markings located below the ghosted image on the right page.



御家族揃つて迎春
前右より昌子令室・氏・たつ子母堂
後右より一郎氏・要二氏・清司氏・辰衛氏

山王ホテルに於ける御夫妻



昭和十三年五月元清水市長塩原時三郎氏が
朝鮮より上京の節自ら撮影せられたるもの

今もなほかへり來まさむ心地して

かとへに立ては秋風の過く。

寂しきもの一閃すれは身のうちの

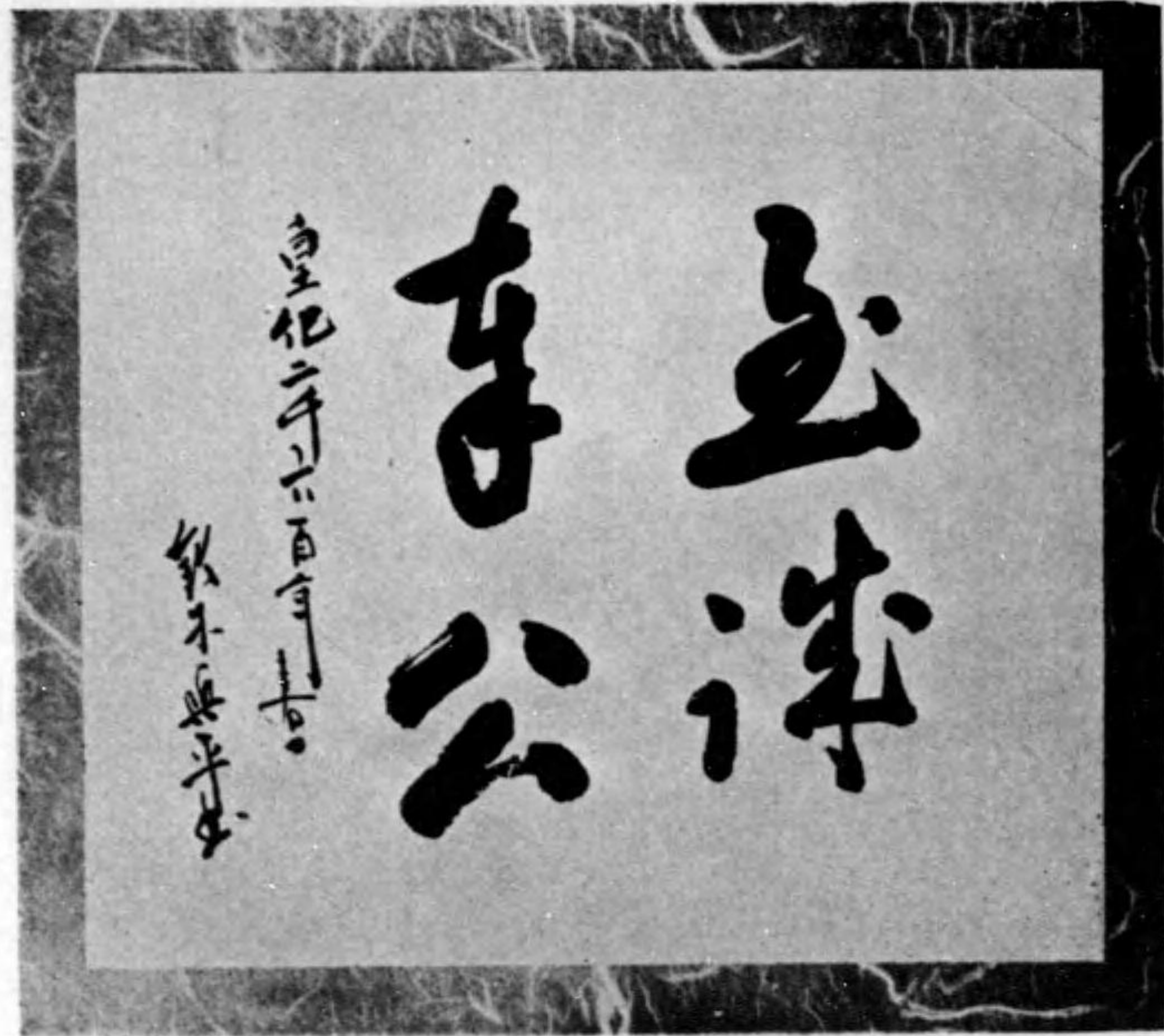
いけるもの皆凍るかと思ふ。

君をおもひ君を偲ひて明け暮れぬ

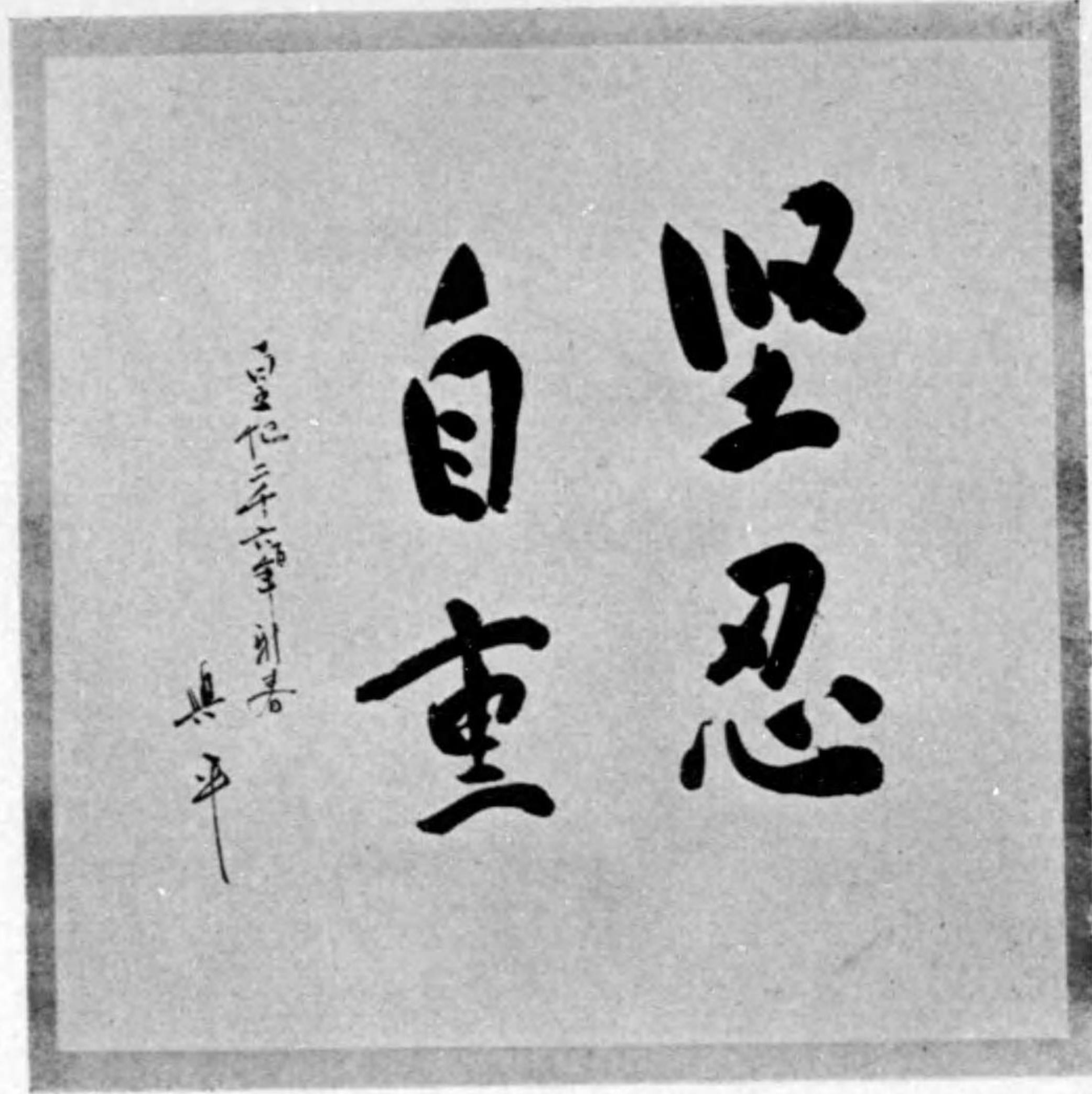
かなしき年よおもひ出の年。

朝な朝な手向くる花に露ふかし。

昌子



(一) 筆絶るたれらせ毫揮てに床病



(二) 筆 絶



絕筆 (三)

序

畏友鈴木與平氏の長逝ほど吾人に痛惜寂寞の情を懷かせたものは無い。而も今以てその不歸を疑ひ、徒らに猶健在の如く思はれてならない。

氏とは夙に肝膽相照らし、常に激勵誘掖を蒙り、何事にも提携援助を惜しまれなかつた事を憶ひ浮べて、獨り切々の思慕を覺えるのである。

別けても、市制施行前後の偉大なる盡瘁貢獻と清水港修築の献身的活躍とを始め、港都開發に對する幾多懸案の解決に献策奔走された不斷の熱誠を偲べば、今に於て洵に感慨無量、衷心より深謝の至り

に禁へない。

寔に氏は市政の恩人にして郷土の偉人であり、眞に喜憂を別つべき我が唯一の畏友であつた。されば若し吾人に文と閑とを恵まれるならば、積る思出を辿つて、せめても自ら氏の業績を録して後人に傳へ度く切なる念ひはすれど、意あつて委せざるを洵に遺憾とするのである。

幸ひ本市教育會に於て、氏の傳記編纂を企て、會長自ら執筆して茲に本書の刊行を見たことは、寔に意義深くして我が意を得たりと謂ふべく、欣快感謝に堪へない。之を通覽するに、編者が公職の劇務に膺りながら寸暇を求めて短期間に記述されたるに比し、克く内容巨細に互り、氏の面目躍如たるものがあり、必ずや將來之に依つて郷黨の追慕敬仰の情を新ならしめ、一般の教化に資する所亦尠からざる

べきを信じ、深く敬意を表する次第である。

昭和十六年十月

清水市長 山田勝四郎

序に代へて

父の病氣が癒つたら憩うて貰ふために、興津へさゝやかな休息所を計畫したのだつたが、遅れ／＼に漸くこの程となつて出来上つた。従つて遂に父は一度も入らずに他界して、我々俸共がその餘恵に與ることとなつて仕舞ふとは全く思ひがけぬことであつた。

今日は寔に静かな初秋の一日である。清見瀉は湖の如くとろりと凪いで、その中を折しも一隻の汽船が静かに出帆して行くのが見える。私は父が亡くなつてから頓に増した繁忙さから今日は開放されて、この一日をこゝに斯く過し得ることに心から感謝しつゝ、静かに父のことを思ひ浮べて見たのである。

私にとつては父のことについて無論語り盡せるものではない。

何から書いてよいか判らない。父が各方面に互つて伸ばした足跡を辿つて見た時、私では却つてどうもうまく表現し得ないことを知つた。

兎に角父は物事に丁寧であり、親切によく人様のお世話をした。家に關係のある方の慶弔には極めてよく注意し居り、祝電弔電出迎見送等細々と指示すると共に、祝詞弔詞、其の他手紙等代筆させる場合の如きも必ず目を通して添削し、而も立案者の氣持をそらさぬ點に迄氣を配つた。訪ね來る者あれば、時間、用事の如何を問はず居留守を使ふやうな事は絶対になく、如何なる者にでも喜んで會ひ親身になつて出来る限りの相談相手になつてやつた。

誠意以て事に當り人を動かすと言ふか全くよくつとめ、又腰も低い人であつた。父は政友會に屬してゐたが邪なれば同派の人をも

嗜め、又正しくば反對黨の意見にも賛し傾聴したから、立場上反對した人でも心では感服してゐた。紛糾收拾出來ざるが如き問題でも、どこ迄も圓滿に纏め上げるといふ風であつたし、援助することになつた人に對しては、己の不利をも顧みず誠心誠意骨折つた。自分より地位の低い者に對しても極めて慇懃で、その人は恐入るといふ風であつた。これが結局誰彼となく無限の親しみを以て父の下に集つて來たものであると思ふのである。

人を信ずること極めて厚く、一度信任した者を配置せばすべてを任すといふ風で、人事のことは八釜しかつたけれど業務については任せ切りで、擔當者は寧ろ今少しく自己の働きを見て貰ひたい位だつたと云ふ。それでゐて相談に來れば何でも親切に指示を與へて呉れる。公人としての立場は時に自己の私的關係には著しく不利

になるをも顧みず、その公平な處置は敬服の的となつたが、この爲會社の當務者からは尊敬と誇りとを含んだ特殊な不平がある位であつた。

外觀は所謂豪傑型ではなかつたけれど、大きな氣持と度量を具へて居つたから、一見非常に異つた性格即ち豪傑肌の仁と會へば互に意氣投合し、この種の人物との交友も多い。所謂趣味もなく、樂みを欲求するでもなく、又名譽を求めるといふ譯でもなく、身に欲なく、心は常に豊かに、何かに屈託することなく、丁度水の流るゝが如くであつた。

父が何と言つても心血を注いだのは清水であつた。即ち郷土たる清水のために生きそして死んだ。然しそれは狭い郷土愛的な意味ではなしに、清水を自分の職域とし、清水に自己の職域を見出し、そ

の職域に於て如何にして完全に奉公の誠を盡すかであつた。今日職域奉公なる言葉が旺んに用ひらるゝけれども、父はこの新しい語を知らずして而も最も完全なる實踐者であつたと思ふ。その生活態度と奉公精神に全然街氣がなく目立たないが爲に、又終始一貫清水の爲に捧げて來たが爲に、一見地方的存在の如くに見ゆるけれども、その觀點、活動内容を見る時牛刀割雞の憾を覺えるのである。

私は冒頭に一隻の汽船を描寫した。この船こそ港の育て親である。私はこの一隻の汽船の入出港にも父が如何に苦しみ、如何に努力したかを思ひ浮べたからである。父の精魂を傾注した問題、即ち清水港修築工事と之に伴ふ工業立市、市制問題、關東大震災對策、富士身延鐵道の全通並に國有移管、各汽船會社定期航路の寄港、砂糖移入場指定、罐詰工業等は、すべて第一には清水のためであり清水の最重

要問題であり、又清水の今日の發展のすべての基礎となつた。

父逝いて早くも一年有半、世相は急變し急轉回しつゝある。東亞共榮圈建設でふ理想の彼岸へ共に船出した我々は、太平洋の波高く荒狂ふ怒濤の眞中を進んでゐる。決して平穩なる航海ではない。老練なる船員の一人でも多いことを望むのである。然し今や頼む父は在せず、享け繼いだ私共がたゞ訓へられた海技をこの試鍊の嵐に鍛へるより他にない。然しこの中であつて父は必ずどこかにあつて私共を見つめてゐて、正しい針路、正しい操作を傳へて呉れるものと信ずる。

生前父はよく私共に言つた。「お前達には財産ばかりでなく借金も一緒に添へてやるよ」と。「子孫の爲に美田を求めず」の譬への如く寔にそれは耕して丹精せねばならぬ田地であつた。さう云ふもの

の父はよく耕していつてくれた。場所によつては種子も蒔き、苗さへも植ゑて行つてくれた。然し之からもほんとに丹精して行かねば稔らない。もとより天地の恵は無邊である。精を出し刻苦し、その生活體驗の中から尊い光を求めなければならぬ。

終りに臨み、今般清水市教育會に於て亡父傳記編纂の御企を見た事は、生前特に教育に關心深かりし父を記念するに、寔にこれに勝るものなく、下里教育會長をはじめ教育會各位に於かれては公務極めて御繁劇の中を非常なる御熱意と御苦心とによつて遂に上梓されたことに心からなる謝意を表す次第であります。

興津にて

昭和十六年九月二十七日

嗣子 鈴木與平

編者の言葉

巨人鈴木與平氏易簣して既に一年數月、時に觸れ事に付けて、鈴與さんは實に偉い人だつた、全く立派な方だつた、と頻りに追慕景仰の聲を聴くが、洵に維れ畢生の社會貢獻と皎潔崇高な人格とが斯く然らしめるのであつて、厥の後昆に繋がる郷黨の敬慕を想ひ、不泯の生命を頌へつ、感激の更に新なるものがある。

氏は郷土の生んだ空前の偉人であり、倫常實踐の垂範者であつて、清水市教育會創設以來十六年間在任の名會長であつた。されば教育會は、貴き生涯の記録を残し長く後人の教化に資せんとする冀望の下に傳記の編纂を企てたのであるが、編者は故人を思慕する餘り、不敏菲徳も顧みず敢へてその執筆を引き受けた。

最初はせめても御一周忌迄に刊行を了すべく念願して、取り敢へず市内小學校長各位の會同を煩はし、七月下旬に鈴與講堂に於て打合會を開き、御遺族始め商店重役諸賢の参考意見を伺ふと共に萬端の便宜を仰ぎ、夫々資料蒐集の分擔を定めた。爾來學校は暑中休暇を利用して關係方面を歴訪し、各位の直話を拜聽して九月中には概略の資料を届けられたのであつた。

斯くて資料の検討補足と纏綴系列の工夫とに荏苒日子を経過する中に早くも秋色深く、皇紀二千六百年の奉祝日を迎へたのである。此の夜、聖紀の慶祝に貴族院議員として晴れの參賀を遂に恵まれなかつた故人の事共熟々思はれて、三更几案に黙考し、聽て呵筆に時を過ぎした。以後毎宵少し宛書き續ける豫定はしたものゝ、公務繁劇に紛れて意に委せず、漸く時折の餘暇に斷片的に綴り溜めたので、

叙述に一貫の流れを缺き、編纂の内容形式も杜撰粗漏を極め、脱稿も遅延したことは自ら遺憾とする所である。固より不文淺徳の自分が、稀代の大人物を對象としてそれを表現せんと考へることは、據木求魚の類であり、甚だ無分別であつて、巨人の姿を在るが儘に描くべく却つて貴き影を亂し、意滿たずして齟齬の嘆多きことは、顧みて寔に恐縮慚愧に堪へない。

たゞ編述の事に従ふが故に、獨り幾夜重ねてその人徳を偲び、念頭深く高風を銘じ得たことは望外の幸甚であつた。

北穹仰げば芙蓉の靈峰雲表に聳え、秀靈端然の山容は坐ろに氏の姿心方正なる風格を思はせ、八面玲瓏の景觀は正に偉人の天真を發露するが如く、俯して港津を望めば青波の岸壁を洗ふ所故人在世の不斷の活躍を偲ばせるものがある。

此の小篇頗る杜撰なれども、必ずや將來その人を得て完璧の玉編も出づべく、唯々幸ひに、之に依つて聊か故人の巨績を仰慕する縁ともならば、眞に光榮の至りに堪へない。

爰に本書刊行の爲に、格別の御援助御高配を寄せられた鈴木家並に同商店内各位に對し、深甚の謝意を表すると共に、貴重なる資料を提供され、或は特に玉稿を惠贈された諸賢及び資料探訪に奔走盡瘁の勞をとられた關係各位に對し、衷心より感謝の誠意を捧げる次第である。

昭和十六年十月

下里龍夫識

鈴木與平氏傳

目次

序 説	一頁
第一章 生立と修學時代		
一 幼少の頃	九
二 小學生の頃	一一
三 修養の一記録	一三
四 中學生の頃	一七
五 高商生の頃	二〇
目次		一

六、 鈴木家に望まるとして……………二二
 七、 鈴木家と先代……………二四

第二章 鈴木通太郎時代

一、 當時の鈴木家……………二八
 二、 頼母しき若主人……………三〇

第三章 鈴與襲名後の事業經營

一、 家業の擴張……………三二
 二、 會社經營……………三六
 三、 關係會社……………四九
 四、 事業經營態度……………五五

第四章 實業界に於ける活躍

一、 各方面に努力貢獻……………五六

二、 清水商工會議所會頭として……………五七
 三、 歐米實業視察……………六〇
 四、 輸出向鮪油漬罐詰事業に就て放送……………六五
 五、 表彰と光榮拜浴……………六九

第五章 政界に於ける活躍

一、 市政に對する貢獻……………七三
 二、 縣政に對する貢獻……………七七
 三、 貴族院議員に勅任せらる……………七八

第六章 清水港發展に對する業績

一、 開港の沿革……………八〇
 二、 港修築の努力……………八五
 三、 工場誘致の努力……………八九
 四、 殖産興業に對する貢獻……………九一

五、公益優先の信條……………九五

第七章 教育教化に對する業績

一、精神生活……………九八

二、店員の教化……………九九

三、社會教化に對する盡瘁……………一〇一

四、育英事業に對する貢獻……………一〇六

第八章 銃後支援の赤誠

一、皇軍感謝の生活……………一一一

二、支那事變前の軍事後援……………一一三

三、支那事變と軍事後援……………一一四

四、光榮と表彰……………一二七

第九章 家庭人としての倂

一、家庭に於ける日常……………一二八

二、家長と家人……………一二二

第十章 社會人としての素描

一、恭敬謙讓……………一二八

二、沒我寬容……………一三〇

三、朋友に對する情誼……………一三三

四、強い責任感……………一三四

五、義理と仁情……………一三六

六、利他益世……………一三九

七、關東震災に於ける活躍……………一四一

第十一章 罹病と逝去

一、發病と治療……………一五〇

二、病氣再發と病床生活……………一五一

三、逝去と悲しき歸郷……………一五六

四、餘 茶……………一五八

第十二章 市葬の盛儀

一、火化の儀……………一五九

二、市葬の儀……………一六〇

三、弔 辭 抄……………一六六

第十三章 逸 話

一、公明正大の戒め……………二〇二

二、來客の氣持を思ふ……………二〇三

三、冗談を言つた友人恐縮す……………二〇三

四、斷じて誘惑を排す……………二〇四

五、支那語講習の先鞭……………二〇四

六、木炭車を眞先に使用す……………二〇五

七、寛容店員を愛す……………二〇五

八、雨中に禮服で魚釣……………二〇六

九、無理はせぬもの……………二〇七

一〇、優情に老妓の感激……………二〇七

一一、仁情漲る軍刀……………二〇八

一二、信じて人を生かす……………二〇九

一三、僚友の成績に雀躍……………二一〇

一四、不徳義には斷乎譲らず……………二一一

一五、人材を養ふは我が義務なり……………二一一

一六、僚友の忠言を喜ぶ……………二一二

一七、敢へて不便を忍ぶ……………二一三

一八、珍らしい作歌……………二一四

第十四章 追 憶

一、恩師の憶ひ出……………山本良吉氏談…二一五

二、學友の追憶……………秋月致氏談…二二三

……………松田卷平氏談…二三八

……………加藤周藏氏談…二三六

……………塩原時三郎氏談…二四二

……………友松圓諦師談…二四六

三、元市長の追憶……………高碓達之助氏談…二五〇

四、心友の憶ひ出……………櫻井源作氏談…二五二

五、業界友人の追憶……………

六、店員の思出……………

第十五章 家人と遺志顯彰

一、昌子夫人……………二六三

二、當主……………二六四

三、遺志顯彰……………二六六

鈴木與平氏年譜……………一頁…一八頁

寫眞目次

秩父宮雍仁親王、同妃兩殿下 工場御視察……………卷頭

久邇宮朝融王殿下 工場御視察……………同

鈴木與平氏近影……………同

御家族揃つて迎春……………同

山王ホテルに於ける御夫妻……………同

病床に於て揮毫の絶筆 (一) (二) (三)……………同

鈴木家所有船明治初年……………對面頁

新婚時代の御家族……………二四

令嗣子を抱いて……………三二

壯年時代……………三六

全國罐詰業大會に議長として挨拶……………四八

寫眞目次……………九

渡米の初り淺間丸甲板上にて嗣子一郎氏と共に……………六〇

縣會議員初期當選の頃……………七六

縣會議長の頃……………七六

第二回渡米の頃……………九六

結婚三十年記念……………一二

大正震災に軍官廳の假事務所に充てられたる鈴木商店……………一四八

聖路加國際病院屋上サンルームにて……………一五二

火葬場へ出發用意中の本邸前……………一六〇

御遺骨葬場に遷さる……………一六〇

市葬場内……………一六四

市葬場外……………一六四

鈴木家の寄附に依る病院と建設誌……………二六六

鈴木與平氏傳

清水市教育會編



序

大人格者で生前既に人物の眞價を決定されて居た。世には經綸に富み業績の華やかな人でも、言動に於て必ずしも敬仰に値せぬものがあり、褒貶半ばする者が尠くない。氏の如く益世に誠を貫いて功を夸らず、行迹飽く迄方正謙讓の士は罕である。氏は英傑流の型で無く、謹嚴な紳士であつた。厥の一生

は波瀾の中に功名を逐ふで無く、坦道に卓見を注いで業を興し、郷土開發に畢生の力を輸して絢爛の功績を擧げ、而して倫常實踐に終始せられたので、奇想多彩の逸話は無く平凡の裡に高潔なる巨人として徳望を郷黨に繋いだのである。氏は人間としては全く道德の行者であり、實業家としては天才的事業經營者であつて、其の活躍は全國に著名であつた。政治家としては市會議長たり縣會議長として多年地方自治に俊器を發揮したが、卓抜な抱負を持ちながら貴族院議員當選勿々病の爲に中央の活躍が挫折した事は遺憾の極みである。氏は終生郷土の開發を主眼として一切活動の根據を清水に置かれたので、其の經營事業は悉く市の發展に寄與し、不斷の努力は清水港の整備開發となり、應て營業に餘慶を招來してゐるのづから共榮の實を擧げたのであつた。

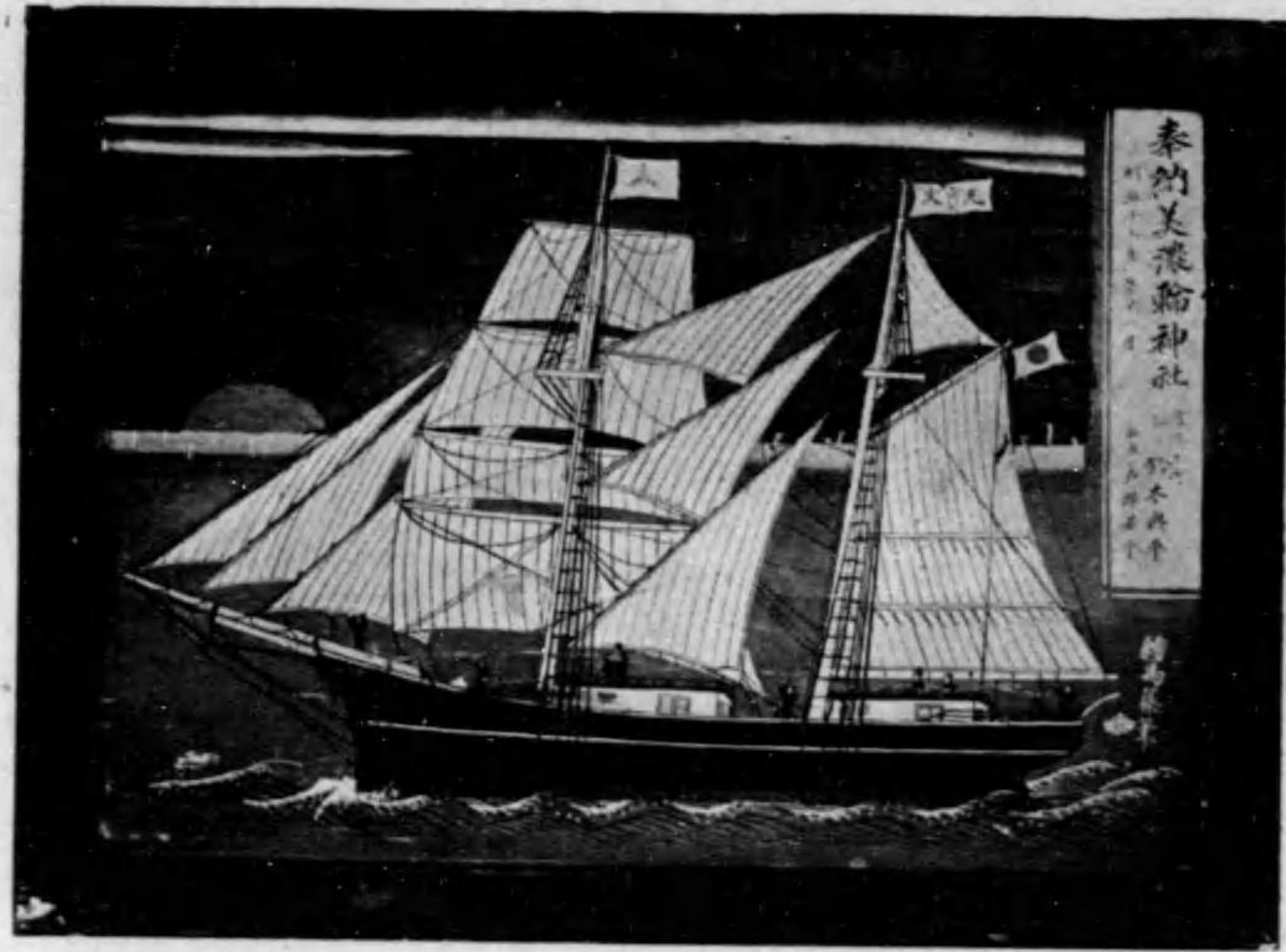
由來郷土は人を育成し、人は郷土を開發して其處に文化の興隆を見るのであるが、時と所に順應する偉大な人爲の作用が無ければ、その進展飛躍を求め、ることは覺束ない。清水地方輓近の隆昌躍進を観るとき、幾多先覺識者の貢獻を偲べれると同時に、殊に高邁卓抜の識見と畢生の努力とを傾倒された氏

の偉大なる功績が思はれるのである。而して氏が如何なる時と所とを得て之を活用し、郷土福祉の爲に善處したかを知得し、清水市の今昔を大觀する上に、敢へて聊か郷土の沿革を挿述しながら更に氏の業績を概説したいと思ふ。

抑々今川氏の江尻小芝城築造以來、武田氏を経て豊臣氏まで巴川が軍事要港とされた關係上、河港の岸に聚落の發達を招き、徳川時代に至り、河流と海潮とに依つて堆積形成された向島と關聯し、漸次川口も南遷して港の位置も南下するに伴ひ清水に港町が出来た。徳川幕府は江尻を東海道五十三次の一宿に定め、清水港に問屋を特定されたので、入江、江尻、辻の郷は宿驛として、清水の郷は船舶交通の要地として、夫々發展の道程を辿つたが、清水方面は幕末より巴川左岸の向島に聚落の移動を見、應て海港として發達を告げたものである。幕府は大阪陣に於ける清水の軍事輸送功勞者四十二戸を選び元和年間に、御船御用と海運取締並に營業獨占の特權を與へ、且つ「駿河小早」の極印を許した。茲に於て一般回船の業は衰へ、沿岸諸港はその機能を失ひ、清水港のみ駿河の代表港となり、殊に駿府を控へ江戸大阪間に介在する主要港として、且

つは甲信に通ずる門戸として、大いに港の發展を約束づけられたのであつた。該指定問屋は特權に對し特殊の保護を受け、明暦の颱風災、延寶の大津浪に際しては幕府の格別な救援扶助を蒙つたのであるが、時の推移に伴ひ、天保十三年に特權を停止されたのである。爾來沿岸進出の同業者と獨占權に繋がる紛争も發生したが、歴史ある清水の問屋は積年の經驗と實力とを以て克く面目を維持する事が出来た。而し時代の變遷に連れて問屋株の賣買も相當頻繁に行はれ、其の數も減じて明治初年には十九戸となり、文化以降同一の屋號を稱するものは播磨屋與平外三名のみで、徳川時代より營業を今日迄繼續して居る者は僅かに五人を數へるに過ぎない。

氏が入婿した鈴木家は今より百四十年前即ち享和元年、港屋平右衛門より問屋株を譲り受けて創業し播磨屋與平と號した。以來一般貨物の回漕、米穀食鹽の取引を營み、港の背域は勿論富士川を經濟的交通路として遙かに甲信方面の物資輸送に従事し、岩淵より甲州三河岸迄鹽船を廻航して、歸船に甲府或は諏訪松本領の貢米を積み、江戸に海上輸送を行ふ等、甲斐との關係は格別



鈴木家所
有船
(明治初年)

密接であつた。かくて星霜遷り世が變つて維新の曉鐘が鳴り響くと、近代文明の脚光を浴びて諸般の變革が行はれた。四代與平氏は此の轉換期に直面して先づ海運の前途に思を潛め、有志と協力して波止場會社を創立し、向島に波止場を築造して大いに船舶の出入に備へ、東海、中央兩鐵道線の開通を見るや、之が連絡の爲に同志と主唱して駿甲鐵道敷設の大運動を起し、或は多年有志の宿望たる開港實現に率先奔走して遂に素志を貫徹し、一面には金融機關の設立、鐵道納炭の取扱、石炭木材の回漕に先鞭を付け、五代與平氏に至つては更に製茶外國輸出の取扱、保險代理業を開始し、更に鹽元賣捌權を受得する等、時流の急潮に棹して克く家業の堅實を加へ、享和創業以來鈴木家は全く清水港の發展と緊密不離の關係を持続したのであつた。

顧みて東海道線と中央線の開通は、當時地方的に急激な影響を與へたものである。即ち鐵路に依つて甲信への玄關口が清水より一時岩淵に移り、中央線に依つて富士川交通路の機能を失ひ、爰に自ら東海道線に因る清水港衰微の一時的現象と、中央線に因る富士川沿岸町村の衰退とは免れざるものがあ

つた、と同時に開港貿易に依つて内外船舶の齎す清水の發展は前途に輝いて居たのである。されば港の整備と背域との關聯、駿甲の鐵道連絡は何は置いても緊要な課題であつた。斯かる情勢下に於て、鈴木家に迎へられた氏は、傳家の歴史と基礎とに立つて、卓越せる抱負の實現に邁進されたのである。

氏は入婿十年孜々として父祖の業に従ひ、大正六年三十五歳を以て町會議員となり、三十七歳にして縣會議員に選ばれて以來旺盛なる社會活動に入つた。當時先づ以て清水曲浦の背域を有機的に統合し、陸の鐵道と海の良港とを活用して、地方の振興を圖り郷黨の共榮を期すべく、時の山田清水町長を支持し、關係有志と相籌り銳意奔走折衝に努め、遂に隣接六ヶ町村併合の下に市制施行の實現を見るに至つた。初代議長就任以來勤續滿十六年、至誠一貫清水港都の開発と、市政の圓滑な運営に全幅の力を注ぎ、別して發達過程相異の町村を併せた寄合世帯の清水市を一元融合の理想郷土に育成する爲には、實に不斷の努力を要したのである。縣會議員三選十二年の間は終始清水港の修築に力を傾注し、國營第二期大工事の着工に偉大な貢獻があつた。更に駿

甲の鐵道連絡には渾身の盡瘁をなし、富士身延鐵道の甲府に通ずる爲に寄與した所極めて甚大である。更に又埠頭に達する臨港線、静岡清水波止場間電鐵、静岡國道等の敷設にも陰に陽に力を致し、多年の懸案解決に與つて大なる功があつた。今や三保の眞崎に連閃白光十四哩の彼方に光芒を放つ燈臺が聳え、二萬噸の巨體を並べて汽船の横着けする繫船岸壁が完備し、埠頭には臨港線も敷かれ、東海、中央兩線を結ぶ富士身延鐵道も開通し更に國有となつたので、清水市は海陸要樞の地たる眞價を發揮し、全く静岡縣の表玄関となり中部日本と裏日本とを結ぶ新しい門戸になつたのである。

氏は此の間に處して克く時運の趨勢を洞察し、卓見達識を傾けて幾多の事業を肇め、數多の會社を經營して殖産興業を圖り、遠く海外と連絡して貿易の振興に力め、商工會議所を設立して創立以來會頭に任じ、率先郷土實業界の誘導、地方産業の發達に竭し、殊に鮪罐詰業を創始して對外輸出と郷土産業の進展とに貢獻する所尠からざるものがあつた。而して清水市が港都たり、工場都市として更に飛躍的發展を遂げる爲に工場誘致の重要性を痛感し、現山田

市長と協力して専念之が實現に努め、時運亦之に伴して大工場が續々建設されるに至り、港修築に伴ふ廣大な縣有埋立地も工場敷地に活用せられ、貝島始め沿岸に煙突林立の盛觀を呈する様になつた。尙氏は精神文化の隆替に深慮を輸し、民心の教化善導に助成を怠らず、育英並に社會事業に力を注ぎ、地方教育振興の爲に繁劇の裡にも十六星霜の間、市教育會長として盡瘁されたのである。

今日清水市の異常なる躍進途上の姿を観る者、顧みて必ずや今昔の感に禁へざると共に、そのかけに原動力となつた氏の功績を坐ろに偲ぶことであらう。蓋し郷土の運命を開拓し得る巨人を要請される時勢に於て、氏の如き先覺者の出たことは洵に清水地方の福祐であると謂ふべきである。其の爲人、その生涯の詳細に就ては各章節の示す所であるが、如上序説に掲げた所以のものは、郷土に照らして偉大なる足跡を偲び、劈頭先づ以て高邁なる氏の輪廓に接する縁にせんが爲に外ならない。

第一章 生立と修學時代

一、幼少の頃

崇高な人徳を江湖に謳はれ、偉大な業績を東海に残して、萬人痛惜の裡に逝かれた故貴族院議員従六位鈴木與平氏は、明治十六年梅花の馥郁と薫る二月五日、芙蓉の靈峰を港に仰ぐ清水市上清水の郷に、山崎治郎七氏の二男末子として呱呱の聲をあげ、幼名を通太郎と名づけられた。

生母は、隣郡袖師村嶺の舊家澤野仁右衛門氏の二女にて美禰と呼び賢婦人であつたが、不幸にも明治二十年十月二十四日、未だ五歳の幼き通太郎さんを殘して病魔の爲に不歸の客となられた。

人生幼くして慈母と永別するほど悲憫な事は無い。秋風漸く寂寥を告げ、

月下の清見潟に過雁の影を宿す頃、頑是なき通太郎さんは父の膝下を離れて袖師なる母の里方澤野家に引取られた。

當時、澤野家は仁右衛門氏の二男精一氏が家督を相續して居たので、同氏が温情を注いで愛育する事になつた。

伯父は資性頗る謹嚴の仁で、幼少から繪畫書道に親しみ、世襲の農業に精勵の旁ら、不斷に研究を續けて技倆妙域に達し、又地方の茶樹、柑橘の栽培に適するを着眼して、その研究を重ね、特別栽培の蜜柑は歳々、高貴へ献上の光榮に浴した程で、産業の開發に竭し、公益に献身の努力を注がれたのであつた。夙に信仰心厚く、常に家人就寢の深夜、佛前に端坐して木魚を叩き念佛三昧に入つたといはれる。家庭に於ける子女の養育は頗る嚴格で聊かの我儘も容さず、食事の如きも雇傭人と差別無く決して好き嫌ひを言はせなかつた。かくて謹嚴な家風は隣近に傳へられ、當時の青年若衆も流石に澤野家の門前を通過する際は頬冠をとり、夜間の漫ろ歩きに流行唄も止めたといふ事である。

伯母は優れた貞淑温和な方で慈愛に満ち、多くの子女に對し懇切周到に克

く面倒を見られた。

環境は人を造る。通太郎さんの搖籃は不幸にも生母に永別の悲哀には遭つたが、この伯父母に抱かれて、嚴格と愛撫との裡に恙なく天稟の資は育くまれ、後年の偉大なる鈴木與平大人の素養が培はれたのであつた。

二、小學生の頃

その頃世俗の言ひ傳へに、六歳の六月六日に入學すれば丈夫で成績が良いとあつて、此の吉日を卜し、袖師小學校の門に入り、四年の課程を卒へて組合立巴高等小學校に學び、二學年履修の後、縣立靜岡中學校に進まれた。

天性頗る濃厚で他に親切、事に勤勉の美德を備へ、伯父母に優しく仕へて日課の使ひや家事の手傳を怠らず、義弟達の面倒も克く見て、毎夜入浴の世話を日課のやうに行ふのであつた。

當時の學科は、讀方、綴方、書方、算術であつたが、その成績は常に優秀拔群で、受持教師が横砂の分校に出掛けた留守は助教を務めたと云ふことである。學

習の際に時折、友達の思ひも及ばぬ質問を放ち同輩を驚かした。例へば當年の學友なる者の述懐によると、先生に「波はどうして起るのですか」と聞かれたことがあつた。平凡に似て而も我々にとつては實に奇想天外の質問であつたと語られた。又或る幼な友達の話に「通太郎さんは友人の争ひに何時でも仲裁に這入つたが、その人格に對して私共は喧嘩を持ち出す事が出来なかつた。自然に備はる人品に對して誰も一步を譲つてゐた。戦争ごつこなど行ふ時は常に謀格で指圖し、私共は一線に立つて遊戯したものだ」と。竹馬の友の追憶にも床しい少年時代の面影が偲ばれる。品行方正で學習に専念し、指導者の立場に立つて僚友を善導し、高等小學校の頃から、日曜は晝間、其の他は夜間に隣近の友達を集めて熱心に教導したと云ふことである。時折は自分の小遣を割いて本を購ひ求め、之を友人に與へて讀書を勧めたといふ程で、今も尙その本を大切に保存して居る者さへある。

その頃夜學とはいへ、單に教科の復習に對する面倒を見るばかりで無く、古聖賢の道を緯とし、自分が平素伯父から諭された教訓を經として克くその實

踐を指導されたのであつた。

三、修養の一記録

静岡中學三年の頃、所謂「小學」を修養の糧として記録された「小學適用講義」はそのまゝ保存されて在るが、少年時代の行狀と照し合はせて生活體驗の躍如たるものが深く感ぜられる。そして静岡から折々歸省の際、近隣の少年達を集めて教へ諭した所の資料となつたであらうことを思へば、左に掲ぐる記録は洵に嚴肅な感激を覚えさせるものがある。

小學適用講義

明治三十一年一月吉日

第三學年生 澤野通太郎

弟子篇 學生心得

先生が教へて行つた時には、弟子たるものは之を手本として之に習ふ。其

れについては、しとやかに恭しく。自分からこれで満足だとしなない。(まだタラン／＼としてゐる)受けた所は力を極めて研究する。善い事を見てはその善い事を己れに取つて學んで行き、筋道にかなつた事を聞けば猶之を行ふ。

しとやかにおとなしく親に孝、長に對して弟、驕つて己れの力を鼻にかけるやうなことをしてはならない。どこまでも温恭自ら虚しくすべし。

心の向つて行く處は信實であるやうにし、正しくあるやうにせよ。

行は常に正直で、遊ぶにも身をおくにも常にきまつて居つて無鐵砲なことをしない。さうして徳のある人に就き従ふがよい。

又一身には顔つきがとゝのふ。(心がチャンとして居らざれば能はず)心には必ず則る所があつて、しだらでなく、朝は早く起き、夜は遅く寝ね、衣服や帶などがチャンと飾つてあるやうにする。

朝新しい所を教はつて、さうして夕には已に修めたる所を復習する。心をほしいまゝにしないでつゝしむ。

以上述べたることに注意して懈らない。これは學問する者の規則である。

孔子曰く、學問は實行を主として學べ入の子弟たる者は親の前に出ては孝、親の傍をはなれて外へ出ては兄に弟を盡す。

身を謹んで言つたことは必ず行へるやうに、他の人に對しては同の者ならば同じやうに愛して偏頗なきやうにする。而して仁徳ある人に近づき親しむ。行をして居て、行がどうかかうか出來て其の餘暇に技能だの文章を習ふがよい。實行を修める事を重として學問して行け、學問をしても實行におかなければ學びたる益なし。

賢者を賢者として尊び、父母に事へてよく其の力(心力、財力、體力)の及ぶかぎり衣食住を充分にする。君に事へて其の身を致し、朋友と交りて偽りがなかつたなら其の人は別に何々を學び、何處々々で勉強した事はないと言つても、吾は之を既に學んだものと言つてよい。

明倫篇

父子の親

朝夕出入平生の居所言語の事につき

曲禮に曰く、人の子たるもの禮儀は冬は温にして夏は清しくすると。則ち時候を凌ぎ易くする。(親の身に適ふやうにする)(親に安心させる)夜には、おやすみなさいとか、ごきげんようとか禮をなして別れ、朝はお早うとか、ごきげんようとかと御機嫌を伺ふ。親の身にかはりは無いかをよく伺つて、又己れのかはりのないことを知らせて親に安心させる。さうして後に寝ね、朝もその通りに御機嫌を伺ふ。外出するときには必ず行先を告げ、歸れば必ず親に會つて歸つたことを知らせる。さうして留守中にかはりないかを伺ひ且つ己れも又無事に歸つたことを見せて親に安心させる。遊ぶ所は必ずきまつて居り、若し遊ぶところが定り無く、又一生涯修むべき業が定まらないやうで、アチラにもコチラにも手足を出してゐる事が親に知れ、ば親が大いに心配する。さうして恒に言ふ言葉にも年に關する事を言はない。何となれば、年をとつたなどと云ふ事を親の耳に入れると何かと心配が起さるものなり。子の親に事ふる、愛と敬とを本として事へよ。謹んで玉を執るが如く、水の盈てるを捧げ、をるが如くつゝしみり、しく四角ばつて居るのは親に事へる

わけではない。即ちかどばらない。

父母がこれを食べよと呉れたならば、嫌ひだと雖も必ず少しくこれに箸をつけて後の仰せを待つ。

四、中學生の頃

静岡中學校に入學してからは愈々天稟の才幹を發揮し、餘裕綽々たる底力に僚友を不思議がらせた。一見弱々しい感じを思はせる美少年であつたが、頭腦極めて明穎、思慮頗る綿密で、各學科に互つて差別なく成績優良で常に首席を占め、品行方正、學業優秀のため特待生となり、静岡中學第十五回卒業生として首席の榮譽を擔つて目出度く業を卒へたのであつた。

在學中特に目立つたのは、平常悠々閑々の態度で少しも勉強して居る風も無く、さりとして試験期日が切迫しても殆んど試験勉強の模様が見えなかつた。友達が明日の試験に夢中で勉強してゐる時、自分は悠々として自信に満ちた様子であり、そして必ず成績が第一位であつたことは洵に不思議な位で、おそ

らく學んだ事はその場で覚え込んで忘れなかつたであらう。然らば所謂秀才型かといへば決してさうでは無かつた。「自分は秀才だ」「自分は優等生だぞ」といふ誇りは殆んど持たなかつたし、表はしもしなかつた。それは餘り努力せず、優秀な成績が得られるので、寧ろ當然また自然に思はれて、誇らしい氣持の起る餘地が無かつたのであらう。

相變らずいつも、普通人の普通の態度を以て平靜な餘裕のある學生々活を送つた處に、いかにも奥床しい人格の閃きがある。そして社會生活も同様に敬服すべきものが多かつた。

在學中に水泳部が創始されるとその部員に加はり、第一回は秋葉山に合宿して數町先の袖師海岸に水泳の練習を試み、その後は水泳場が江尻方面に變更したので寺院に宿泊して之を行つた。水泳部開設以來毎回缺かさず練習に参加し、拔手は尤も得意とするところであつた。

明治三十年頃、同校の生徒であつた柏原知格氏が當時の一高生石井徹氏(後年郵船會社々長となる)から野球を學んだことから、始めて靜中野球部が生れ

た。一高の大投手青井氏は來岡して親しく野球の指導に當つた。その頃の捕手は吉澤潤平氏、投手は松田卷平氏(後陸軍中將)で、野球黄金時代を呈し、遠征に來た横濱商業を再度まで撃退した程であつた。然し未だ學校當局が野球の理解を持たない頃であるから野球部としては何かと都合が悪かつた。そこで、學業優秀な眞面目な人物を部員に推薦する事が學校當局より信用を受けるにも、萬端の交渉をするにも好都合だとの理由で、通太郎さんは推されて野球部の委員となつた。

爾來野球部と學校當局との間に立つて、意見の具申や種々の折衝に奔走努力し、一部の選手達には半時間宛早く登校させて學習の世話まで力を惜しまなかつた。平素餘裕が充分で悠々と特待生の榮冠を占め、而も優秀の成績を決して鼻にかけないので、野球部員として實に評判がよく、僚友からは敬愛を受け、その存在に依つて創設直後の野球部が、どれほど信用を昂揚されたか知れない。

因に中學時代は日清戰爭の講和成立の明治二十八年春から、北京に義和團

事件の勃發した明治三十三年の春までの期間で、日本海の風浪高く東洋更に多事を告げる頃であつた。

五、高商生の頃

在學五星霜の間終始優等首席の成績を以て一貫し、明治三十三年櫻花爛漫の彌生の春、目出度く静岡中學校を卒業し、伯父母の満足も亦格別であつた。伯父精一氏は之より實社會に立たせる考へであつたが、静岡中學校長川田正徵先生(後東京府立第一中學校長となる)並に恩師山本良吉先生(現武藏高等學校長はその人物才幹を見抜いて居つたので、中等教育のみで終られることを痛く惜しまれて、頻りに精一氏を説き勧め、遂に上級學校に進學させることにしたのであつた。固より學術優秀、人物も申分が無いので、入學志願の手續をすると無試験で、東京高等商業學校(現東京商科大学)に入學を許可され、笈を負つて帝都に遊學することになつた。

爾來四ヶ年の本科、二ヶ年の專攻部と合せて六星霜の間、高商生として銳意

研鑽の功を積んだが、專攻部に於ける研究は將來を洞察して貿易科を希望したものの、伯父の意見に従つて銀行科を專攻することゝされた。願ふに後年、貿易港としての大清水建設の爲に献身的な努力貢献をせられた事共彼此相觀ずれば、其の先見の明とその使命とが、既に學生時代に深く約束づけられて居たと謂ふべきである。

高商在學六ヶ年の研究は中學當時と同様、平靜なそして懸命な態度を持続したが、常に充分な力の餘裕を見せて居た。生來着實眞摯な爲に決して學生の本分を忘れたり、趣味の方面に趨つたり、或は娛樂に耽るやうな事は少しも無かつた。後に實業界の重鎮として、或は政治界に重きを爲して繁劇な生活を送るやうになつても、依然として趣味や娛樂の方面には極めて淡泊で、世俗の非難を毫末も受けなかつたことは、之を學生々活の延長として見るとき洵に思ひ當るものがある。

在學中は休暇毎に歸省して家藏の經書類に親しまれ、殊に論語などは常に愛讀されたことである。爰にもその性格の一面を窺ふことが出来る。

當時富士郡出身の在京學生有志約十名が東京小石川に一家を借り受け、富士同志會と稱して共同生活をして居たので、縁故關係の影山氏を頼つてこの仲間入りをすることになった。そして先輩の去つた後は會計を始め一切の經營に當られた。共同生活に於ては餘暇さへあれば何かと同志の爲に働き、殊に下級生に對しては優情を傾けて親切に之を導いた。英語は特別得意であつたので、下級生の復習を随分よく面倒を見てやつたとのことである。

在京遊學中に頗る基督教を研究されたが、若冠にして精神生活に親しまれ、宗教的情操の深厚であつた事が偲ばれる。既に静岡中學校時代に會話練習のため宣教師に接して、おのづから神の存在問題に深甚の關心を持ち、上京してから、先輩の縁者菊池七郎氏(現關西學院教授)と同宿の機縁で、基督教信者の同氏から誘獎を受け、信仰の度も昂り、その頃友人達が内村鑑三氏の門下であつた關係上、同氏の門を叩き熱心な信仰生活を續けた。

同門の學生には小山内薫、倉橋惣三、淺野猶三郎の諸氏があり、高商同窓の信者として紅松雄二氏(後年支那稅關勤務)が親友であつた。

六、鈴木家に望まる

幼にして慈母を失ひ、伯父の澤野精一氏に養育されて二十年の歳華は恙なくも忽々に過ぎた。謹嚴な伯父と慈愛に溢れた伯母とに感化と撫育を受けながら、修養研鑽怠り無く、東都の遊學も優秀の成績を以てその業を修め、人格は歳と共に愈々鍊成されるのであつた。

翻つて當時の鈴木家に於ては、四十年間清水町政に貢献して令名高き儀平翁(四代與平氏)が明治三十七年五月九日に町長在職中、六十八歳を以て長逝せられ、五代與平氏が家業の經營に専念して世襲の事業に力を注いで居つた。四代與平氏は袖師村澤野仁右衛門氏の息男で、親戚に當る鈴木家の養子となり、男子が無かつたので長女たつさんに同様親戚に當る庵原村の山梨家より啓次郎氏を迎へて婿養子としたもので、之が五代與平氏であり、後の通太郎氏の養父である。五代目與平氏夫妻には子供が恵まれなかつたので、親戚にあたる富士郡岩松村の素封家、影山市郎兵衛氏の愛嬢昌子さんを未だ乳飲み子

のうちに迎へて養女とし、愛撫措くところを知らなかつた。殊に四代與平氏夫妻に於ては、眞に愛孫として眼に入れても痛くないほど寵愛されたといふことである。そして通太郎氏の高等商業學校を卒業する頃は、愛嬢昌子さんは立派に成人して、東京女子大學を卒業した才媛であつた。

先代は夙に通太郎氏の中學時代より、その人物才幹の非凡なるを矚目し、高等商業專攻部の卒業を心算かに鶴首して、將來是非共自分の家督を繼がせ度きものと念願頗る強いものがあつた。殊に血縁の關係も格別の事から、澤野精一氏に頻りに懇望之れ力めた結果、遂に容れられて目出度く話が纏まり、昌子嬢の夫として婿養子に迎へる事となつた。時は明治三十八年十二月の黄道吉日で、翌年六月東京高等商業學校專攻部を卒業した此の青年紳士は、多年蘊蓄せる學識と卓抜の手腕とを提げて、二十四歳の若き血潮に躍々たる希望を漲らして、實社會の活舞臺にその第一步を踏み締めたのであつた。

七、鈴木家と先代



新婚時代の御家族
右側 先代鈴木與平氏と室令
左側 昌子さま夫人と鈴木通太郎氏

鈴木家は清水港の舊家で、創業は享和元酉年今より百四十年前の事で、初代を播磨屋與平と稱し一般貨物の同漕と米穀食鹽の取引を営まれた。安政大地震に際し祝融のために記録を焼失したので、三代までの業績を詳かに出来ないが、四代鈴木與平氏に就いては、清水町の偉大な功勞者として其の沿革誌に明記されてゐる。左の抄録に依つて其の爲人と在世の活躍が偲ばれると思ふ。

◎鈴木與平氏爲人豪壯常に進取の意氣を負ふ。夙に力を公共事業に盡し、本町の爲に貢献する所頗る多し。氏は庵原郡嶺村、澤野仁右衛門氏の男、天保七申年を以て生る。二十歳の時、安政二年、清水鈴木家の養嗣子となる。爾來家業たる同漕業に従事し、東西各地に取引をなし、廻船を所有し、以て業務を擴張す。氏が本町の公職に就きたるは實に安政五年にして二十三歳の時なりとす。此の年駿府町奉行より町頭役を命ぜらる。明治元年、静岡藩廳より年寄役を命ぜらる。明治七年、副戸長となり、學校幹事となり、又浦役を兼務す。明治八年有志と協同し、波止場會社を創立して向島へ波止場を築造し、船舶出入

の便を開く。十二年巴川に港橋を架す。又博運會社を設置して通商の便を謀り、十四年有志者と謀り清水銀行を創立し重役に擧げらる。十六年清水小學校及び巴高等小學校新築に方り建築委員となる。二十二年自治區成立の際推されて名譽職町長となる。二十四年病を以て職を退く。二十八年高等小學校復築に方り委員となる。三十五年再び町長に就任す。時に年六十七、變鍊壯者に譲らず、孜々として職務に膺る。三十七年五月、在職中病を得て不起、五月九日を以て遠逝す。本町專念寺の塋域に葬る。三十七八年戰役終るに及んで、君復た功に依り勳八等に叙せらる。葬儀當日、町會議員總代の祭文に言ふ、

「君仁俠の意氣に富み、公益自ら任じ私利を顧みず。教育に衛生に勸業に港灣に道路に、其の成績顯著にして町民君が徳を愛慕せざることなし。君が如きは實に身を以て本町に貢献したるもの、嗚呼斯人逝くと雖、諸般事業は永遠に存在して衆人皆其の恵に頼る云々、亦以て氏が本町に於ける盡力と徳望とを知るべきなり。氏公共事業に對し、教育に土木に衛生に救恤に其の他金員

を寄附したる頗る多く、其の賞を受くる實に二十三回の多きに至り、常に公共事務に盡瘁して本町に貢献せしもの實に四十年、老に至つて志氣益々堅し。其の功勞頗る稱すべきもの多し……

因に四代鈴木與平氏は、最初の名を儀平と稱し、隱居して再び儀平と改められたのである。

五代鈴木與平氏は、庵原村山梨家より入婿し、極めて着實に孜々として家業に勵み、先代(四代目)の町政に献身盡瘁して社會公共の爲に奔走寸暇無きに對し、氏は専心以て世襲の業務を擔當し、銳意その發展に努め、清水港の開港場指定と相俟つて製茶輸出の取扱を始め、鹽專賣法施行に際しては鹽元賣捌人の指定を受け、又保險代理業を創める等、家業の經營に全力を注ぎ、清水港と共に鈴與商店の名聲を博するに與つて大きな力があつた。

養父物故の後、は代つて町會議員となり、町政に參畫して港清水の發展に熱誠よく盡力されたが、大正六年二月二十六日、五十五歳を以て病の爲に長逝された。

第二章 鈴木通太郎時代

一、當時の鈴木家

東都の遊學を終るや否や、囑望されて鈴木家の婿養子となつた頃、同家は、五代鈴木與平氏に依つて家業も手廣く營まれ、鈴與商店の聲名は既に清水港と共に東海にその名を高く謳はれて居つた。

抑々清水港には、徳川幕府が駿府城の防衛と彼の大阪兩役に方り、清水海運業者の盡した功勞とに因り、元和年間に御船御用一切と海運取締並に、安倍川より富士川に至る沿岸營業獨占の特權を賦與し、且つ「駿河小早」と稱する極印を許與した四十二戸の諸問屋が在つた。鈴木家は今より百四十年前、即ち享和元酉年、前記諸問屋の一つである港屋平右衛門よりその問屋株を譲り受けて創業したのである。初めは播磨屋與平と稱し、一般貨物の同漕と米穀食鹽

の取引とを營んで居たが、當時、富士川を遡つて甲信地方に送られる鹽の多くは其の手で取扱はれてゐた。明治二十二年東海道線の敷設に際しては、先々代(四代目)與平氏がその建設材料の取扱を請負ひ、剛毅果斷なる性格は、晝夜を別たず自ら陣頭に立ち現場を指揮督勵し、その熱誠努力は大いに世間の信用を得、開通後は鐵道納炭取扱を請負ふことになり、又各社納めの石炭、材木、雜貨等一般同漕及び陸送請負も期せずして委せられ、大いに業務の伸展を見、同家の基礎はこの頃より清水港に於て抜くべからざる地位を築いたのである。

先代(五代)亦庵原村山梨家より入婿し、四代目の家業を引継ぎ、孜孜營々極めて着實に業務の發展に努めたので、既に隱居して儀平と舊名を唱へてゐた養父(四代)の町政に對する献身的努力に依る清水港の開發に即應して、同家の營業は頗る順調に進展して行つたのである。即ち明治三十二年八月には、儀平翁(四代目)はじめ町有志者の積年の素志が貫徹し、清水港は開港場に指定せられたが、當時開港草創の際であつた爲に、輸出入額も少く、或は閉鎖の虞れも無しとしなかつたので、明治三十五年に茶業家と謀り、清水港積横濱港積替北米

シヤトル港向製茶輸出を始めた。鈴興商店今日の製茶輸出取扱の初めであり、之が清水港製茶輸出の嚆矢である。

石炭の販賣は、明治二十八年頃から石炭回漕取扱に關聯して營業としても之を開始し、北海道炭礦の石炭販賣を始めたのが最初であつて、漸次各炭礦の炭も扱ふやうになつた。其の他前述の鹽は明治三十七年に鹽專賣法施行と共に鹽元賣捌人に指定せられ、又明治三十九年より保險代理業も創めた。

斯の如く鈴木家は、徳川幕府特許問屋として保護を受けた舊家であると共に、幕末より明治にかけての自由經濟時代には、進取闊達な先代が出て清水港の發展を畫し、同家も亦之に即應進展し、克く時流の急潮を乗り切り、營業の基礎漸く堅く、氏が社會活動發足の爲には寔に鬼に金棒の譬の如く好個の境遇に在つたと謂ふべきである。

二、頼母しき若主人

鈴木家の若主人となつた頃、日本郵船會社は茶の積取に清水寄港を開始し

た。當時船舶代理業務に精通せる者がなかつたので、自ら日本郵船會社に入り船舶代理業務一般を習得し、更に富士製茶會社に就いて製茶輸出關係の事務を見習ひ、斯くて船舶代理輸出取扱並に貿易事務を習熟するや、歸つて店主(五代目)を輔佐し、克く店員を率ゐて専念家業に没頭し、家業の回漕業或は石炭販賣業に精勵を續け、其の熱誠努力と懇切敏速とに依り、營業の信望愈々加はり、父母に對しては孝心の誠を披瀝し、家人に向つては溫情を吐露して常に率先好範を示されたので、おのづから何人にも敬慕せられ、洵に頼母しき若主人として内外の囑望を受けられたのであつた。されば鈴木家に入つて二年後の明治四十一年三月には、早くも静岡縣石炭商組合長に推されて引續き其の職を全うし、又大正五年一月には株式會社清水銀行監査役に就任し、翌春は清水町會議員に當選し、若くして既に偉材たる閃光を放つたのである。

第三章 鈴與襲名後の事業經營

一、家業の擴張

養父は五代目鈴與として、その商才を發揮し大いに家運を興隆されたが、惜しむらくは大正六年二月二十六日、未だ働き盛りの五十五歳を一期として二賢の爲に他界されたので、氏は痛悼哀愁の裡に家督を相續し翌三月十九日、襲名して通太郎を與平と改め、爰に六代の鈴木與平氏となつたのである。

爾來父祖の業を繼承して孜々經營に膺り、その卓抜なる識見と熱烈なる努力とに依つて大いに事業の擴張を遂げ、商店の充實年と共にその度を加へ、實業界の信望益々厚く、遂に今日の隆昌を見るに至つた。即ち、

石炭販賣業は大正八年に於て三菱商會社豊橋出張所の營業を繼承して支店を設置し、又清水港背後地域たる甲信地方との連絡のため、富士身延線の



令嗣子を抱いて

(明治四十三年頃)

開通に全力を注ぎ、昭和三年待望の同線全通を見るや、率先甲府市に出張所を開設し、多大の犠牲を拂ひ自ら進出の先陣を承つたのである。

昭和五年頃より煉炭製造工場を起し、年毎に發展の一途を辿り、現在清水、豊橋、濱松の三工場を經營するの盛況を告げてゐる。

鹽元賣捌は前述の通り、明治三十七年の鹽專賣法に基き指定を受けて居たが、大正七、八年の頃内地鹽の不足を來した際、專賣當局の慫慂に依つて清水波止場に、關東州鹽を原料とする再製鹽工場を開き、次で大日本鹽業株式會社より尾州半田工場を譲り受け、爾來今日に及んでゐる。清水工場の製造許可高は年額一千百五十二萬三千七百四十四匁、半田工場の方は四百十五萬二千匁で、原料は主として關東州鹽、臺灣鹽を使用し、販路は大阪府、三重、岐阜、愛知、静岡の諸府縣に互り、製鹽は夾雜物特に尠く品質は内地一等鹽を凌ぎ高級鹽として愛用され、一般家庭用、漬物用、味噌、醬油釀造用或は干魚、梅果漬等に使用され頗る好評である。昭和五年五月、畏くも、

今上陛下、本縣御巡幸の砌り御料鹽として御用命を仰せ附けられ、無上の光

業に拜浴する事が出来た。

同漕業は日本郵船株式會社を始め、幾多有力なる汽船會社の代理店を引受け、同漕取扱の數量は年額百十數萬噸に達し、岸壁荷役に或は一萬三千餘噸の舢舨によつて陸揚積込を迅速に扱ひ、貨物收容の爲には、地の利を得たる一萬五千餘坪の倉庫を用意し、更に木材は縣營貯木場の外に數萬坪の私設貯木場を備へ、又陸揚機、専用鐵道線等の設備を持ち、全國屈指の同漕店として鈴與商店の根幹たる業務となつてゐる。猶、同漕業は同家創業以來の家業であり、特許問屋として幕府の絶大なる保護の下に業態そのもの、堅實性も加へて、次第に強固なる地歩を築いて來た事と思はれるが、幕末明治の自由經濟勃興の反動期にも、前章に述べたる先々代、先代の經營宜敷を得て微動だもせず、この盤石の基礎に立ちて信望愈々厚き氏は、期せずして清水港出入の貨物荷主より全く取扱を委せられる事となつたもので、今日の本業に於ける獨占的巨歩は、必ずしも氏の敏腕によつて獲得したものではなく、實に信用と聲望とに基づく自然の歸結と見られることを特筆して置きたらう。

砂糖移入取扱に就ては、昭和六年六月より移入場の指定を受け保稅倉庫の事業を始め、現今鈴與倉庫株式會社が之を經營し、各製糖會社の移入糖を保管して業績逐年激増を見てゐる。この移入場指定については、時の井上藏相に、縣民の福祉を數字の基礎に立つて熱烈に説き、當時氏とは反對黨の藏相も流石にその熱誠に動かされて、遂に先願の諸港を追抜き未曾有の迅速さで之を認可されたもので、全く業界を驚倒せしめた逸話を残してゐる。斯くて縣下には安價の砂糖が入るやうになり、港の移入額及び稅收の増加と、更に清水港に於ける倉庫業の獨立性とを招來したのであつた。

石油販賣業は昭和八年八月から之を開始し、ガンリン、及び鑛油類を取扱ひ、静岡縣下一圓の外に神奈川、愛知の兩縣にも販路を擴めてゐる。

商店の營業斯くの如く多岐に亘り、各種の事業頗る擴大するに至つたので、之が統制經營の必要に迫られ、昭和十一年三月三十一日を以て株式會社組織に變更再製鹽事業と疊に法人組織とした倉庫及び自動車を除く他の一切の業務を擧げて悉く之を會社が繼承する事になつた。

惟ふに鈴與商店が年毎に發展躍進を遂げ、今日の隆盛を招來した所以のものは、固より先祖代々の經營宜敷に適ひ、盤石の基礎を築いた爲ではあるが、特に識見高邁の氏が非凡の才能を傾けて父祖の業を繼承し、不屈不撓の努力を注ぎ、地方の開發社會公共の福利増進を念として私なく、ありとするも結果の末にて所謂公益優先の信念を貫き、之に配するに賢夫人の偉大なる内助の功があつたからであつて、一業を創むれば周盡く之に倚るの有様で、求めずして自ら大をなして行つた。勿論事業達成の裏面には、順風に棹さす事ばかりある筈はなく、此の間には随分時と場合とに依つて抑揚もあり、苦境に遭遇した事もあつたが、克く勇斷と周到な配意とにより一途の邁往を續け、その圓滿篤厚の人格は常に店員の感激發奮を生み、社會の信倚を蒐め、熱誠不斷の活躍はつひに成功の實を結んで、東海に鈴與商店の名聲を博することになつたのである。

二、會社經營



壯年時代

◎株式会社鈴與商店

昭和十一年の春、鈴與商店を株式会社とし、初代取締役社長となり社員を指導督勵して益々業績を擧げることになつた。

△石炭販賣營業の實際狀況を觀るに、明治三十年頃は清水港の入荷僅かに四千噸位で需要先も鐵道管理局、富士製紙株式會社、現在王子製紙株式會社等に過ぎなかつたが、營業所も清水本店、豊橋、甲府兩支店、濱松、横濱兩出張所を設け、本支店販賣年額三十五萬餘噸に達し、販路も静岡、愛知、山梨、長野、神奈川、東京の一府五縣に擴張され、敏活に而も圓滑に供給して顧客の絶大な信頼を受けてゐる。取扱炭は、九州炭、北海道炭、常磐炭、宇部炭、樺太炭、撫順、其の他滿洲炭、鴻基無煙炭、印度支那産、朝鮮無煙炭、コークス、大同白煙炭、青島炭、開平炭等、この内無煙炭は主として石灰製造用、鍛冶用、或は煉炭用に使はれ、これ等の仕入は各地礦主と直接契約して入荷すると共に、三井物産、三菱鑛業、古河石炭鑛業、日滿商事、日産化學工業、東邦炭礦、貝島炭礦、石原産業、海運等有力な礦主の特約店として一手に引受け、貯炭を豊富にして廣く一般需要家に便宜を圖つて居る。

因に、石炭需要の動向も時代に依つて消長の著しきものがあり、日清戦役の直後、全國の石炭消費高は一千萬噸で、日露戦役の頃は一躍二千萬噸に激増し、第一次歐州大戦の頃は三千六百萬噸に達したが、昭和六年頃には二千萬噸に激減し、支那事變以來また非常に膨脹した様な状態で、鈴與商店の取扱量にも時に依つてその消長は免れなかつた。而し一般工業界の活發な隆勢に伴ひ、石炭の需要が急激に旺盛となり、従つて商店の營業は未曾有の發展を告げる様になつた。常磐炭の如く鐵道に依つて直接工場へ輸送して居るものもあるが、多くは清水港から陸揚して之を配給する。昭和十四年の實績に依れば、静岡縣の石炭消費量は大約五十萬噸、このうち鈴與商店の販賣高は二十五萬噸であつた。

△煉炭製造販賣業の狀況は其の生産能力に於て、清水工場一萬五千噸、豊橋工場一萬五千噸、濱松工場五千噸、計年額三萬五千噸で港に直面した清水工場は海陸の運輸頗る便利に恵まれて製産能率も向上し、今や鈴與煉炭の名は洽く江湖に知られ、現在静岡縣下は勿論、東京府、神奈川縣中西部一圓並に山梨、千

葉、長野、愛知、山形等の各縣に到るまで廣範圍に互り販路網を敷き、製品も品質に細心の研究努力を拂ひ益々需要者の好評を博し、生産量は逐年増加の一途を辿つて居る。尙各種煉炭器具を取揃へ、又豆炭、木炭の取扱も營み、特約店や需要家の利便を講じてゐる。

△專賣局鹽の取扱は、内地鹽及び移入鹽の二種で、内地官鹽は回送一手引受人たる日本食鹽回送株式會社の清水港代理店として清水納入分及び甲府、小田原、下田の三回送先の仲繼取扱を行ひ、移入鹽は大日本鹽業會社より專賣局納入代理人として清水納入分、名古屋、四日市、半田納入分を取扱ひ、更に名古屋地方專賣局管内の輪移入鹽回送の取扱も行つてゐる。

◎鈴與倉庫株式會社

先代逝去の翌春即ち大正七年五月に本社を創立して初代の取締役社長となり引續き經營に努め、營業は年と共に發展を見つゝある。本店を清水に置き支店を甲府と半田とに設け、資本金壹百萬圓、全額拂込濟倉庫業法に依る發

券倉庫として貨物の保管、配給、保税倉庫業務、倉庫貸貸、海陸運送元請金融事務代行其の他附帶業務を營み、現在倉庫面積は總延坪數一萬五千餘坪で、稅務官の詰所を始め、雨中荷役用庇、構内鐵道引込線、荷造用ミシン、猫車其の他一切を整備されて居る。

本店に於ては所有倉庫の半ばを株式會社鈴與商店同漕部と專賣局へ貸與し、半ばは主として砂糖、罐詰類其の他貨物の寄託を受け常に満庫の盛況であり、目下増設の計畫中である。

倉庫は岸壁船溜に近接し、倉入荷役に至便なると共に、引込線路を有する等倉出し貨車積みにも頗る利便のため收容貨物は著しく増加し、特に昭和六年大藏大臣より先願の諸港を差置き、内地移入糖移入場の指定を受けてから年豫期せざる激増を來し、最近に於ては年間約三十五萬擔の砂糖を移入し、縣下は勿論、甲信地方に至るまで其の圏内に包括され、將來の發展は大いに業者の囑目する所であつて、日糖、灣糖、明糖、鹽水港、帝國、昭和、沖繩等各社の移入糖を收容し、完全な保管と圓滑な荷捌をして居るが、將來は直接消費糖の増加と共に

に果實罐詰、煉乳、冰糖、製菓用原料糖の激増も豫想され、移入數量も益々増加の一途を辿るべく、營業の前途は極めて洋々たるものがある。

尙輓近清水地方に於て罐詰工業の發展するに伴ひ、罐詰製品の寄託も愈々増加し、特に水産罐詰販賣會社、日本蜜柑罐詰工業組合聯合會、日本農産罐詰共販會社等の指定倉庫として、罐詰類の保管は當社の重要な部門となり前途亦大いに期待されて居る。

◎ 駿遠鹽業株式會社

鹽專賣法に基く鹽の元賣機關として最初安倍、庵原兩郡を管内とする會社があり、大正十四年六月、富士川以西、天龍川以東の同業を合併設立されたもので會社創立以來取締役社長として歴任した。資本金は十五萬圓、本社を清水市に置く。本社創立後見付專賣局は廢止され、氏は名古屋專賣局管内鹽元賣捌人組合の組合長となり全國鹽元賣捌業組合聯合會の理事となつた。

今こゝに鹽元賣の沿革を按ずるに、鈴與商店の創業當時は四國、中國から所

謂千石船で入荷し、一俵の重量は六貫より六貫五百匁あつて、之を四千俵から一萬二千俵位帆前船に積んで來たもので、當時の清水港は甲信方面への鹽の中繼地として重要な役割を演じた事は諸種の記録に見える處であるが、これは清水より海路蒲原へ回漕、更に岩淵に出て其處から富士川を利用したものである。平水の時で鯨澤まで約四日位であるが、出水等の際は四、五日も泊つてゐることもあつた。然るに明治三十六年中央線の開通に依り、東京より甲州に輸送を始めてから、富士川の舟運は一朝にして停止の止むなきに至り、鹽を主體とする富士川交通路を通しての清水港と甲信方面との關係も亦灯の消えたるが如き状態に立ち至つた。背後地を失つた清水港として之が回復策を講ぜんとするは蓋し當然の事ではあるが、先々代即ち四代與平翁は同志を糾合し岩淵を起點とする駿甲鐵道を計畫して奔走これ力め、後富士身延鐵道の認可と共に之が全通に全力を擧げて協力盡瘁して來たのであつた。氏も亦この事に就いては特に熱烈以上のものがあり、全通するに及んでは之が國有につき東奔西走の有様で献身的努力を注がれたのであつた。多年

の懸案が借上契約となり生前に一應解決を見たことは洵に満足の極みであつたらうし、第七十六議會で買収に決定したのを待ち得なかつたことは甚だ遺憾であるが定めし地下に満足されて居られる事と思ふのである。

◎清水運送株式會社

從來清水市内に公認運送店が十三戸あつて、夫々独自の運輸に従事して居たが、數多の取扱店が互に競争して弊害も多く、時勢の大局から見ても合同統一の必要があり、鐵道省亦一驛一店主義を標榜し、之が促進を勸奨して居つたので、氏は一方ならず奔走盡力して遂に鈴與商店運送部の營業部の一切を提供し、之に清水運輸合資會社、中駿委託運送株式會社、旭商船商事株式會社、株式會社丸惠運送店、株式會社天野回漕店、合資會社江尻天野運送店、株式會社大村組江尻支店、袖師倉庫運輸株式會社、壹菱運送店、大木回漕店、清水壹菱運送店を合同し、昭和二年三月資本金百萬圓を以て清水運送株式會社を創立し推されて初代取締役社長となつた。

當時の一驛一店問題は、その間種々のいきさつがあり徹底を缺いたが、眞摯なる氏は甚だ此の點を遺憾とし、當局と大いに激論を重ねその條理整然たるに、頑固で有名なりし流石の係官某氏も頭を下げたと云ふことである。

昭和七年頃の不況には著しく取扱も減退し經營も緊縮せざるを得ず、従業員を減ずるの已むなき場合もあつたが、盡く之を鈴與商店に引取る等犠牲者を出さず専ら切掛けに努めた。その後漸次發展して今日の隆昌を見るに至り、年に九十萬噸の取扱高を示す様になつた。

氏は常に自己の利潤配當を眼中に置かず、只管會社の内容充實を念願し、率先して配當の薄きに甘んじ、市勢と會社との發展にのみ心を碎き、更に従業員を深く信頼して仕事を委せた爲に、社會の信望を繋ぎ、社員に敬服せられ克く人の協和を得たので、社運おのづから今日の盛況を呈するに至つたのである。現今企業の合同を頻りに懲通されるとき、氏は當時既に早くも之に着手し、今や創立十五星霜を閲して社礎いよ／＼堅きも、顧みて之れ迄には實に並々ならぬ苦心が秘められてゐる。當時の一驛一店主義も頗る不徹底であつた。

爲に纏て後日同業の設立を見、再び合同問題が燃え上がるや、氏は率先之を主唱して當局に勸奨大いに努める所があつた。

◎株式會社清水木材倉庫

同業會社が未だ東京、名古屋、大阪のみに設けられた頃の大正十三年に、小宮小四郎氏發企人となり、親交の厚かつた氏と相謀り同年五月に此の會社を創立したのであるが、最初は資本金一萬圓、翌年は二萬圓の合資會社であつた。大正十五年に株式會社に改め資本金も一躍三十萬圓となり、氏は取締役に就任した。而しその頃木材界は不況の時代で、營業も漸次不振となつたが、昭和二年十二月に氏は取締役社長となり、幾多の困難を克服して銳意挽回に努力した結果、遂に現在の如き發展を見るに至つたのである。

◎清水食品株式會社

抑々鮪を罐詰として歐米向輸出品とすることは夙に考究されて居たが、本

格的に企業化するまでには容易でなかつた。昭和四年に本縣水産試験場に於て始めて豫備的製造試験が行はれ、遂に約百函の試製品が紐育市場で試賣されたことに端を發し、幸ひ静岡縣は著名の水産縣で資源豊富なこと、外貨獲得の重要性に鑑み、且つは當時不況の際勞力提供に依つて失業救済も出來、産業の振興にも寄與する事に思を輸し、氏は全く國利民福のために昭和四年十二月八日率先この會社を創立したのである。初めは巴川畔に小工場を起し、取締役社長に就任して事業の經營を始めた。罐詰工場としては縣下最初のものであり、鮪油漬罐詰として事業化したのは之を以て全國の嚆矢とする。其の後この企業が導火線となり、清水を中心に全国各地に同業工場が新設され、その數三十ヶ所の多きに至つたので、昭和七年五月十四日を以て日本鮪類罐詰業水産組合を結成して組合長に推された。

爾來本社の事業は長足の發展を示し、工場増設の必要を來したので、昭和七年現在の位置に更に完備した新工場を建設し、尙庵原郡興津町に興津工場を新設、更に旭海産工業株式會社(千葉縣勝浦町)、丸東罐詰株式會社(燒津町)、茨城水

産工業株式會社(茨城縣大津町)、及び沼津食品株式會社(沼津市)を傘下に收め有力なる罐詰會社として發展を見るに至つた。

罐詰業は水産物のみに限らず、蜜柑其の他の果實も加工して廣く内外の需要に供へて居るが、殊に支那事變以來は軍需品として頗る重要性を帯びることになつた。

附記

昭和八年十月、日本鮪罐詰共同販賣株式會社を結成し取締役社長に就任。

昭和九年十二月、東海蜜柑罐詰工業組合を結成して理事長に就任。

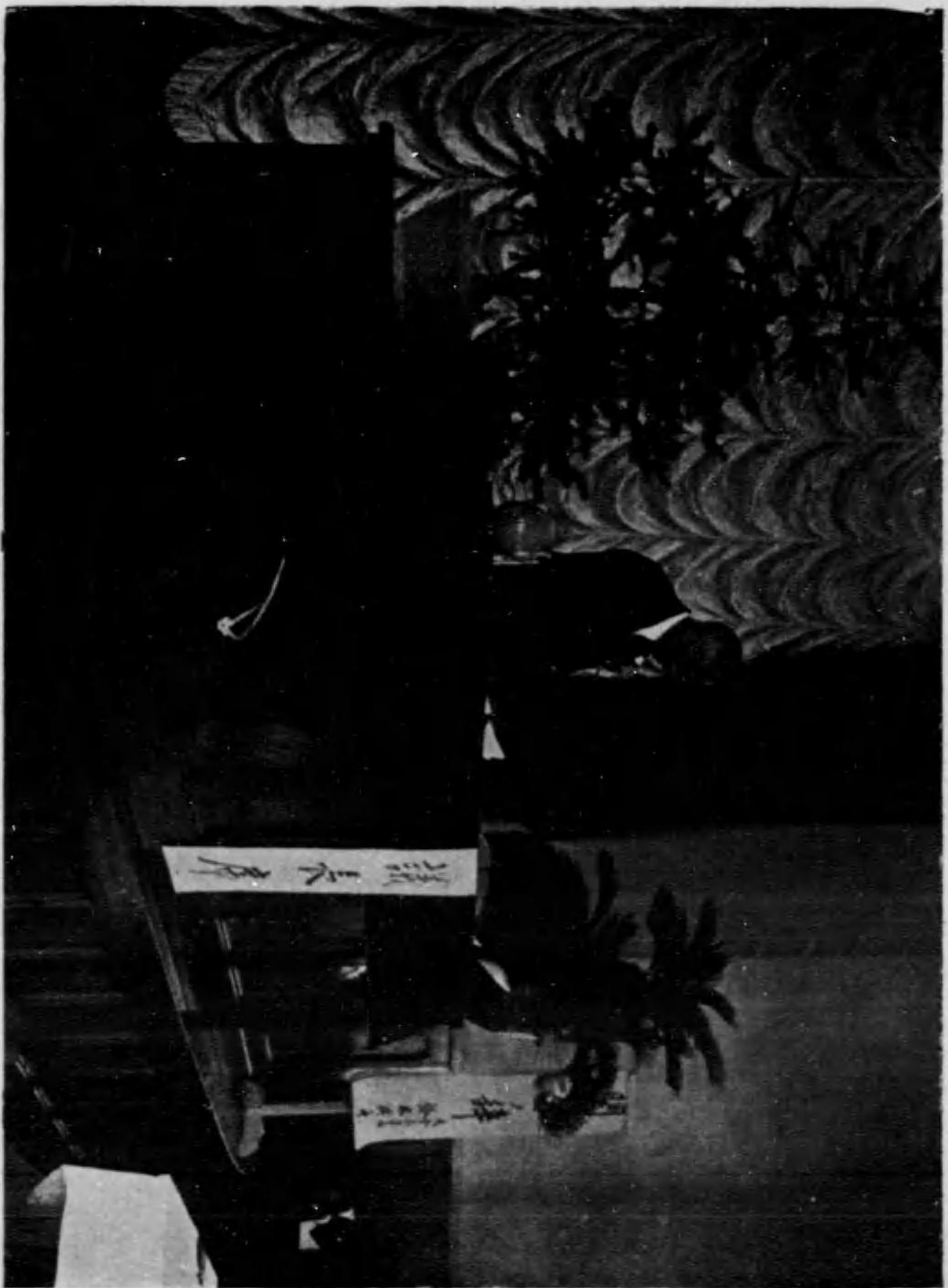
昭和十三年十一月、日本蜜柑罐詰工業組合聯合會を結成し理事長に就任。

昭和十四年六月、静岡縣罐詰工業組合を組織して理事長に就任。

○罐詰業發展狀況參考表

年次	種別	
	全 國	靜 岡 縣
昭和六年度	蜜柑罐詰製産高 六五、〇〇〇 <small>函</small>	鮪油漬罐詰製造高 二八、五〇〇 <small>函</small>
昭和七年度	一五〇、〇〇〇	二六四、九四一
昭和八年度	一三八、一五七	七〇五、四八八
昭和九年度	一〇六、九五六	三二〇、一三〇
昭和十年度	四四五、九一四	二七二、四九二
昭和十一年度	四〇三、六四七	三八一、九一六
昭和十二年度	九八九、一九三	四〇六、五八一
昭和十三年度	一、〇〇九、九〇四	三三二、三八九
昭和十四年度	一、三三五、五四〇	四二八、〇四五

惟ふに今日我が國に鮪罐詰業の發達した根源は、氏の創意努力に在りと謂うて然るべく、氏も亦幾多の關係事業中、鮪罐詰工業には最も心血を傾注し、特



櫻 換てしと長議に會大業詰罐國全

に晩年は罐詰業殊に斯業の爲に専心するの狀態であつた。水産罐詰業振興の爲には前後二回に互り自ら歐米に渡り、具さに實情を調査して販路の擴張に資すると共に、日本品の進出に對抗せんとする米國關係業者と懇談協定する等、遂に現今の如き斯業の隆盛を見る素因を培はれた。

○清水精機株式會社

元來機械部門としては空氣壓縮機製造を主とする合資會社鈴與機械製作所資本金十九萬圓があつたのであるが、支那事變勃發以來軍需品の製造頗る急務を告ぐるに至り、縣當局並に軍部の要望に依つて航空機部分品製作の専門工場を建設する事となり、昭和十四年五月十八日を以て清水市江尻茶町に資本金五十萬圓を以て之を創立し、取締役社長として銳意新興會社の機能發揮に努力せられたのであつた。

三、關係會社

- 株式會社三十五銀行
自大正十年七月至同十五年一月監查役 自同月取締役昭和十二年三月二十七日株式會社静岡三十五銀行に合併迄在任同行引續き取締役
- 株式會社天野回漕店
自大正十二年五月引續き監查役
- 清水倉庫株式會社
昭和二年十二月監查役同四年十二月取締役爾來現在に至る
- 清水瓦斯株式會社
自昭和五年四月引續き取締役
- 静岡電氣鐵道株式會社
自昭和六年十二月引續き取締役
- 株式會社駿州銀行
自昭和七年四月引續き取締役
- 日本鮪罐詰共同販賣株式會社

- 自昭和八年十月至同十四年九月取締役社長
- 南洋水產株式會社
自昭和九年十一月至同十二年十一月取締役
- 静岡貿易株式會社
自昭和十年三月引續き取締役
- 株式會社トモエ商會
自昭和十年六月引續き取締役
- 旭海産工業株式會社
自昭和十年八月引續き取締役
- 茨城水産工業株式會社
自昭和十一年一月引續き取締役
- 福羽燃糸株式會社
自昭和十一年二月引續き取締役
- 静岡瓦斯株式會社

自昭和十一年二月引續き取締役

○沼津食品株式會社

自昭和十一年四月引續き取締役

○丸東罐詰株式會社

自昭和十一年四月引續き取締役

○南光化學工業株式會社

自昭和十一年六月引續き取締役

○大洋石油株式會社

自昭和十一年七月引續き取締役社長

○静岡合板株式會社

自昭和十一年八月引續き取締役

○東洋製乳株式會社

自昭和十一年八月引續き取締役

○株式會社清水合板製作所

- 自昭和十二年二月引續き取締役社長
- 株式會社静岡三十五銀行
- 自昭和十二年三月引續き取締役
- 東洋機械製造株式會社
- 自昭和十二年七月至同十四年九月取締役社長
- 日本通運株式會社加盟店會
- 自昭和十二年四月引續き評議員
- 清水海運株式會社
- 自昭和十二年八月引續き監查役
- 清水小型タクシー株式會社
- 自昭和十二年九月引續き取締役社長
- 株式會社快運自動車商會
- 自昭和十三年一月引續き取締役社長
- 沼津食品株式會社

自昭和十三年六月引續き取締役社長

○日本輕金屬株式會社

自昭和十四年三月引續き監査役

○水産罐詰販賣株式會社

自昭和十四年九月至同十五年三月監査役

○静岡輸出振興株式會社

自昭和十四年十二月引續き取締役

○清華海運株式會社

自昭和十四年十二月創立引續き取締役社長

○静岡縣石油販賣株式會社

自昭和十五年一月相談役

○日本農産罐詰共販株式會社

自昭和十五年二月取締役

四、事業經營の態度

氏は東京高等商業學校に於て六星霜の間専門の智識を修め、之に實業界の豊富な體驗を加へて事業の經營悉く期して成らざる無く、幾多の企業を完遂して産業報國の實を擧げたのであるが、常に郷土の開発、地方産業の振興に思ひを輸し、國利民福を念として自己の利潤追求に重きを置かず、所謂公益優先を心とした紳商の典型で、飽くまで人格道義を重視した爲に、社會に人徳を謳はれ、信望を集めて事業のつから成果を擧げ、業界の重鎮として各方面から頻りに囑望されたのである。其の責任感には實に厚く、その誠意と不眠不休の活動振りには洵に感歎措く能はざるものがあり、全く事に當つて勵最不撓、渾身の努力を續けられたのであつた。

第四章 實業界に於ける活躍

一、各方面に努力貢献

前述の如く幾多の會社を經營し、數多の會社に關係して重役となり、商工業の發達に大いに寄與すると共に、更に實業界の各方面に參畫して其の功績は極めて多大なるものがあつた。

昭和四年三月には清水警察署管内自動車營業組合長となり、同六年一月には清水市材木商組合顧問に推され、同十年十一月には名古屋鐵道局交通協議會委員に委嘱を受け、同十一年三月には財團法人日本罐詰協會常務理事に就任し、同年四月には静岡縣倉庫業協會副會長に推され、同十三年三月には静岡縣石油消費規正委員會委員となり、同年四月には財團法人南洋水産協會評議員に任命され、同年五月には清水市各驛輿津運送業組合長に就任、同年十一月

には日本蜜柑罐詰工業組合聯合會理事長に推され、同十四年四月には静岡石炭統制組合理事長となり、同年六月には静岡縣罐詰工業組合理事長に就任、同年十月には職業協會静岡縣支會副會長に委嘱を受け、尙別に昭和十二年四月に中部産業團體聯合會委員、同十三年七月には静岡縣實業教育振興會評議員となり、實に多方面に互り熱誠以て其の職責を全うせられ、全く寸暇も無き活躍を続けられ、其の貢献する所も亦實に偉大なるものがあつた。

二、清水商工會議所會頭として

曩に昭和二年の秋頃、氏を中心として當時清水市財界の主要な位置に在つた長阪省吾氏、田中吉五郎氏、山田勝四郎氏、原田三左衛門氏、中村藤太郎氏、阪上政次郎氏等相謀り、市内商工業の助成進展の爲に商工會議所設立の議を起したが、時恰も市制施行の後始末で諸事尙困難のため相談もその儘となり、昭和四年の春になつて更に熟議を重ねた結果いよいよ創立着手の話が纏まり先づ創立委員會を設置して氏は委員長に推された。

爾來時の收入役兼産業課長守屋文太郎氏(現商工會議所理事)と共に關係者の集合を求めて毎夜之に出席し、熱心懇切に會議所設立の必要を力説したので、遂に賛成會員八百五十名の多きに達し、全部の入會調印を終了することが出來た。そこで認可申請の手續きを執り、議員定數の増加問題もあつて商工省へ三回も交渉に上京し、昭和五年五月三十日に認可の指令を交付されたのであつた。第一回の選舉が同年八月十日に行はれ、氏は衆望を擔つて議員に當選し、同月二十二日の役員選舉に於て全議員より會頭に推され、爾後引續き十ヶ年の長期間重任して専念克くその職責に盡瘁せられた。

此の間昭和五年十年の震災に依り清水港の被害甚大なるものがあり、爲に之が復興運動に寢食を忘れて奔走し、嚙て第一回八十萬圓、第二回五百五十萬圓の築港工事完成の喜びを迎へることが出來た。

又朝鮮及び大連との定期航路、臺灣航路開設の猛運動を起して之に成功し、或は税關廳舎の新築に多大の援助を致して其の完成に資し、或は身延線國有運動期成同盟會を作り會長として多年の活躍を續け、床次鐵相の時鐵道會議

に於て買收決定となつたが、偶々内閣瓦解に遭つてお流れとなり、その後更に不斷の運動を續け遂に同線の借上げを見るに至つた。惜しむらくは其の後第七十六議會で之が國有と決定した事を知る由も無かつたことは洵に遺憾であつた。

其の他氏は常に清水港の活用、地方商工業の振展興隆に盡瘁して貢獻する所實に甚大なるものがあり、全く名會頭であつた。されば清水商工會議所が氏の偉大な功績に深甚の感謝を表するはもとより、日本商工會議所よりも左の如く之を表彰された。

表彰 狀

清水商工會議所會頭 鈴木 與 平

君ハ多年同會議所ノタメ盡瘁セラレ本邦商工業ノ發達ニ貢獻セラレタル所極メテ著大ナリ、仍テ本會議所ハ茲ニ記念品ヲ贈呈シテ其ノ功績ヲ表彰ス

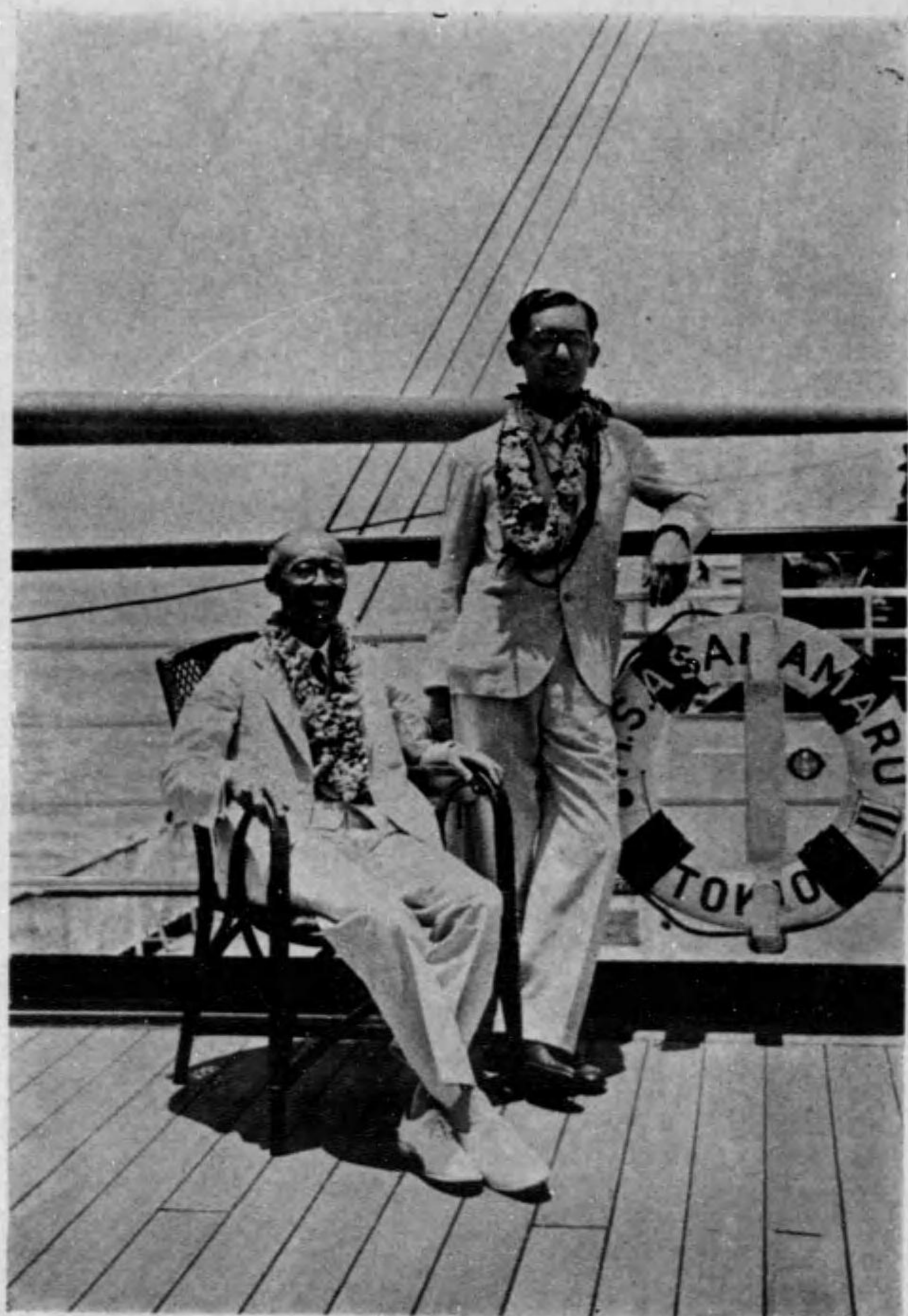
昭和十五年八月十五日 日本商工會議所會頭正三位勳一等 八田嘉明

三、歐米實業視察

◎ 第一回視察

昭和七年の五月、日本鮪類罐詰業水産組合長に推されると其の重責に鑑み、強き責任觀念より、斯業の發展を期する爲に製品輸出計畫上歐米視察を思ひ立ち、自費を以て長男一郎氏を伴ひ、同年七月二十日に淺間丸に乗船して清水港を出港された。萬里の波濤を恙なく渡米後は、ロサンゼルス、シカゴ、ニューヨーク、ワシントン、ボストン、シヤトル等を經由して具さに米國實業界の現狀を視察し、或は財界主要人物と會見して商談を遂げ、之より令息を歸國の途に就かしめ、更に蜜柑罐詰輸出の將來を考慮して、單身歐洲視察を決行し、ロンドン、フランスを視察して地中海を過ぎ、五ヶ月に亙る長途の旅を一路平安、同年十二月十四日に目出度く歸清されたのであつた。

第一回渡米の目的は種々あつたが、最も主たる目的は、日本の鮪油漬罐詰業の急激なる勃興に伴つて彼地の當業者を漸く刺戟する事となり、彼等は政府



てに上板甲丸間淺り砌の米渡
影撮に共と氏郎一子嗣
(夏年七和昭)

當局を動かし、安價良品の日本製品に對してクレームや關稅をつけんとする容易ならざる形勢になつて來たので、之が對策を施す爲であつた。従つて彼地に着くや、當業者の居るロサンゼルスに約二週間滞在し、その間製造業者の有力者ホーンステン商會、太平洋貿易等と會見、或はニューヨークに於て輸入者側たる三井、三菱、野崎商店等とも打合せ、更にワシントンに農務省を訪れる等、製造業者、輸入業者、更に政府當局と折衝し、大いに意志の疎通をはかられたのである。

◎第二回視察

從來組合員は製造品を自由販賣とし、従つて自由製造に流れる爲輸出上値崩れの懼れがあつたので、之が販賣統制の必要に迫られ、茲に日本鮪罐詰共同販賣株式會社を創立して其の社長に推された。それは昭和八年十月である。今度は日本鮪罐詰共同販賣株式會社取締役社長の資格を以て、氷川丸に乗船昭和九年二月六日に横濱港を出帆された。斯くてロサンゼルスに於て製

造業者と折衝大いに力め、時に夜を徹し、内地とも打合せ、談判は時に破裂の有様に立ち至つた事もあつたが、終始克く粘り続け、又農林省及び業者の力強き聲援を得て遂に之を説得することが出来た。折しもワシントンに於ては本問題についてヒヤリングが開かれる事になつて居たので、氏は其の席に乗込み業者と折衝の顛末を述べ、委員連とも談合折衝の結果遂に了解を得、輸入禁止問題は中止となり、關稅は四割五分以上賦課せざる事及び輸出货量は年額三十五萬函を最高限度とすることに話が纏り漸く難問題が解決されたので、同年七月十一日に六ヶ月目で無事歸國されたのであつた。

現在に於ける鮪罐詰輸出も對米關係に關しては、今尙この解決案を實施してゐるのであつて、業界の統制はこの時既に完備し、戰時下に於てすら何等改編の要を認めない。寔に氏の斯業發展に盡瘁せられた功績は偉大なものがあると謂ふべきである。

茲に掲げた左記の書翰は、氏が横濱を出帆してから九日目の昭和九年二月十五日に、令室昌子夫人宛投函したもので、異境の旅途において尙且つ念々人

のため世の爲に思ひを輸し、財の公益活用を念願する崇高な人格の躍如たるものがある。

◎書翰の一節

急な旅立で何かと忙殺定めし、迷惑なことであつたらうと御察し致します。乗船後は意外に波靜かにて船長なども今時斯様に靜かなことは稀であると申して居ります位、一日二日は曇、時々雪がはら／＼と落ちたこともありますが、其の他は快晴で實に氣持がよい、荒れること／＼して覺悟して乗つたのに如此恵まれた天候には感謝せざるを得ない。

然し出發當時の風邪はなか／＼癒らず、たんと悪くもないが室を暖める爲に電氣ヒーターを使つて居るので空氣が乾燥するので咽喉がわるく咳が出るのと熱が少し出るので大切を取り大抵室に引籠つて居ります。醫者も親切に時々診察に来て呉れますし、同行の兩君も話しに来て漫談に時を移すので別に退屈もせず過しました。乗客も非常に少く一等船客は我等

一行の外に僅か四人、ツーリスト(二等?)十四人と云ふ寂しさ、従つて船長事務長等も殆んど掛り切りの様に款待して呉れます。友松先生の佛教概論ゆつくり讀みました。御蔭で充分に休養もし反省する機會を得たことを此の上なく喜んで居ります。船も追手で存外早くバンクローパーに着きさうです。後二日しかないらしい。早く、風邪を退治して着米の上は一働しくてはならないと思つて居ります。

市制十周年記念祭は如何でした。知事より商工功勞者として表彰された由、金儲けをして表彰をされるとは少し虫が良すぎる様に思はれます。然し集められた財、之は決して自分の物ではない預けられた物である。我々は最善良なる管理者でなくてはならない、そして出来る限り廣用廣受しなくてはならない。店員にしても、店員の家族にしても我々に信賴して安心して居るではないか。どうか出来る限り財政を整理し事業を堅實にし之を一つの財團のやうにし、店に働く人々の安全なる資源であるやうにする義務がある。そして我々の周圍の人等が一人でも飢に泣くことの無いやう

にしてやらなければならぬと思ひます。子供等にもよく此の意を體して將來財を私物のやうにせぬやう心掛けて貰ひたいと存じます。云々。

四、輸出向鮪油漬罐詰事業に就て放送

第一回歐米視察を行つた翌年、昭和八年七月六日に氏はラヂオを通して左記の如き放送を試み、業者は勿論一般に多大の感銘を與へた。

鮪を歐洲向のオリブ漬の罐詰として輸出することに就てはずつと以前に色々研究もせられ一度は企業化したこともありましたが、不幸にも間もなく影を潜めて了ひました。對米輸出品の研究は、大正八、九年頃にも色々な研究報告が見受けられますが、本格的の調査研究は昭和三年十一月の全國水産製造主任者會の議題となつてからであります。本縣に於ては水産試験場に於て、昭和四年に各種數回の豫備的製造試験が行はれ、後遂に約百函の試製品が紐育市場で試賣せられたのに端を發するのであります。

それから全國に先立つて昭和四年十二月に清水市に清水食品株式會社が呱呱の聲を擧げるに至つたのであります。輸出事業は國益になると云ふ事と、不況の際幾分なりとも勞力提供の機會を與へると云ふ微意に發したのに外ならなかつたのであります。然るに昭和五年事業を開始致しました所が、紐育市場で品質が良いと云ふので賞揚せられ、初めから豫期以上の成績を擧げ得たのであります。

それより毎年製造工場を増設が各地に計畫されました。當市丈でも七箇所出來、縣下では十五箇所、全國では二十九箇所となりました。

前述の如く本事業は我國に於て異常の發達を致しましたが、是れは全く爲替の低落に起因するものでありまして、決して正常の發達ではないのであります。忽ち米國の同業者を壓迫する結果となりました。加之、我國に於ても新興事業の禁止の政治的運動迄引起す様になりました。通弊である粗製濫賣が始まり、米國罐詰業者の原價より更に遙に安く賣られたので、彼等に大なる衝動を與へ、其の結果、各種の方法で輸入の阻止方法が講

ぜられたのであります。無理からぬ事もあると思ひまして、昨年七月私は渡米し、カリフォルニアの製造業者の主なる人々を訪問して、何とか双方共具合良くいつて此の事業が圓滿に發達する様に努力致しました。二十萬函や二十五萬函のホワイト・ミートの罐詰の輸入はさして苦痛ではないが、非常に安く賣られたので困ると云ふのが彼等の一致せる意見でありました。輸出統制及び生産統制は彼我共に必要なりとして、此の問題が業者間に唱へられたのも此の爲であります。

關稅引上に對する了解の爲には、私はシンブソンと云ふ辯護士を依頼してワシントンに於けるバブリック・ヒヤリング(公聽會)にも出席して辯明之れ努めました。其の後民主黨の現ルウズヴェルト大統領になり、かたゞ關稅引上の問題は一時中止となつて居りましたが、最近外務省に達した公電に依りますと、米國産業復興法の施行は着々進行して、去月二十七日から産業管理局は同法に基き各種同業組合の統制を急ぎつゝありと云ふことでありますから、右産業復興法實施の結果は少くとも米國は輸入制限を行ふ事となり、從つ

て日本の品物も本年の輸出期に入つては相當面倒な問題に逢着するのではないかと憂慮される次第であります。尙彼地からの各種の情報を總合致しますと、鮪罐詰の關稅引上げ問題は、ゴム靴に亞いで緊急問題となつて居りまして、輸出統制、價格決定等の問題は本事業の死活問題となつて參つたのであります。

尙本年は輸入検査が更に嚴重になつて、輸入拒絶品が非常に多いのであります。尤も先方の輸入検査法に對しては不満足の點もありますので、鮪罐詰組合研究部で學術的研究を施行中で、近き將來に於て米國に對して學術的發表をする豫定であります。何れにしても關稅引上若くは輸入防止に對する對策の實行は焦眉の緊急問題であります。

偕て我國に於ては豊富にして低廉、且つ等閑に附せられしトンボ鮪が、外國民の嗜好に適するが爲に高價にして珍重せられ、之に供給せらるゝと云ふことは誠に我國水産業上の慶事と申すべきであります。そこで歐洲市場の開拓も其の努力の如何に依つては、前述の如く相當の成績を擧げ得られないこ

ともなからうと思ひますから、本事業の將來は、製造業者の心掛次第で相當の確實性があり、蟹罐詰と共に世界的商品たり得べき素質を具備するものと思考出来るのであります。

僅か數年の間に長足の進歩を見たる此の貿易品を永久に經營して、一つは國益の爲め一つは業者の爲め之を維持して行くには、どうしても粗製濫造を戒め、互が多少の犠牲は拂つても協調を圖つて統制を執ると云ふ事が最も緊要であると考へるのであります。事業が安定すれば外國製品市價は直ちに我生産魚市場に反映して、常に合理的なる相當高價なる魚價が永續し、漁業者の利益も蓋し大なるものがあると思ふのであります。特に目下の如き經濟國難の際には、輸出振興を圖ると云ふ事は最も大切な問題で、此の意味からも本業の統制を圖り、有終の美を濟し度い事を重ねて希望して已まない次第であります。

五、表彰と光榮拜浴

◎多年鹽販賣上に功勞ありしを以て、大正十一年十二月、專賣局長官より表彰を受く。

◎多年地方産業の開發に功勞ありしを以て、昭和八年十一月、日本産業協會伏見總裁宮殿下より表彰を拜受す。

◎商工並に自治功勞者として、昭和九年二月、静岡縣知事より表彰を受く。

□御陪食仰付けられ優渥なる御下問を賜ふ。

昭和五年五月、畏くも、天皇陛下、静岡縣に行幸遊ばされ、親しく民情を憐せ給ふ御砌り、静岡御用邸に於て特に御陪食仰付けられ、海運界の實情につき優渥なる御下問を賜ふ。

さなきだに日頃至誠謹嚴なる氏が、縦令偉大なる實業功勞者としても、今、草莽の微臣として、天顏に咫尺し奉り、拜謁の絶大なる光榮に惠浴して玉の御聲に拜接したその感激は如何ばかりであつたらうか。

歸來誓つて、宏大無邊の聖恩に報じ奉らんものと感泣久しく時を移さ

れたのも洵に嘸やと推察されるのである。

◇朝香宮鳩彦王殿下、御視察の光榮に拜浴す。

昭和九年三月二日、殿下には清水食品株式會社工場に御成り遊ばされ親しく御視察の光榮を忝うす。

◇閑院宮春仁王殿下、御視察の光榮に拜浴す。

昭和九年三月五日、殿下には清水食品株式會社工場に御成り遊ばされ親しく御視察の光榮を忝うす。

◇久邇宮朝融王殿下、御視察の光榮に拜浴す。

昭和九年八月二十三日、殿下には軍艦八雲御搭乗、清水御入港の砌り、清水食品株式會社工場に御成り遊ばされ、親しく場内御視察の節、氏は御案内旁々斯業の實情を言上する光榮に拜浴した。

◇秩父宮雍仁親王殿下、同妃勢津子殿下、御視察の光榮に拜浴す。

昭和十二年一月二十六日、兩殿下には産業御視察の爲清水市に御成り遊

ばされ、清水食品株式會社工場を親しく御視察の砌り、氏は社長として御案内御説明を申上げる光榮に拜浴し、産業振興に對する兩殿下の有り難き思召に深く感激された。

◇久邇宮朝融王殿下、再度御視察の光榮に拜浴す。

昭和十三年六月八日、殿下には簡閱點呼御執行の爲軍艦長門に御搭乗御入港の砌り、清水食品株式會社に御成り遊ばされ、親しく工場を御視察の節、氏は社長として御案内御下問奉答の光榮に浴し、恐懼感激益々産業報國の覺悟を固めたのであつた。

第五章 政界に於ける活躍

一、市政に對する貢獻

先代が大正六年二月に永逝せられると家督を相續して店主となり、一切の業務を引繼いで専念之が經營に當ると共に、自町の衆望を負つて同年五月清水町會議員に當選し、爾來再選七年間銳意町政に力を注ぎ、大正十三年五月市制施行に伴ひ市會議員に選舉せられ、初代清水市會議長に當選し、爾後滿期再選重任實に十六年間の長きに互つて市政に盡瘁の誠を效されたのである。

此の間市長は初代山田勝四郎氏、二代塩原時三郎氏、三代大石惠直氏、四代山田勝四郎氏で、市制施行以來十六星霜の間には幾多の難問題も起り、随分複雑な事件も屢々生じたが終始一貫公平無私、只管市政發展の爲に當局を補佐し、民意を尊重して事に膺り、克く參畫協賛の實を擧げられ、其の貢獻は筆紙に盡く

せぬ偉大なものがあつた。

抑々清水市は大正十三年に清水、江尻、入江、辻の四ヶ町と不二見、三保の二ヶ村と合併して市制を施行したものであるが、當時氏は清水町會議員として、或は縣會議員として時の清水町長山田勝四郎氏と共に協心戮力専ら六ヶ町村の合併問題に奔走之れ努め、當時の反對派とも折衝誠意を披瀝して解決に當り、其の圓滿なる人格と一意地方の福祉増進を顧念する熱誠とは、遂に市制誕生の絶大なる原動力となつたもので、繼て初代市會議長に推舉せられたのも蓋し故なきにあらずと謂ふべきである。

凡そいづれの町村にも夫々長き歴史と傳統因襲とが在つて、之が合併は決して容易なものではないが、殊に合併直後の市政は創業に屬する爲におのづから諸般の案件も山積し、意見主張も従つて百出するので、市會の運営も亦易易たる業では無い。氏はこの間に處し至誠無私只管郷黨の開発を念として市當局に献策協力の勞を執ると共に、市會の圓滿協賛を誘接して終始更に渝ることなく、遂に市政に町村別根性を減殺し、政黨超越の美風を馴致して克く

協和の實を擧げ、爲に大なる懸案も着々解決して市民の期待に副ふ事が出来た。即ち都市計畫問題を始め、道路、橋梁の架設、交通渡船の整備上、水道の施設、市廳舎の新築、職業紹介所、商工會議所建設、或は小學校の増改新築、市營火葬場の設置、市内塵芥の處理、或は特殊産業の開発、大工場の誘致等各般に互つて大事業の實現完成に寄與せられたのであつた。尙清水港の爲には寢食を忘れて東奔西走し、築港の實現に活躍された功績は實に偉大なものがあつた。

初代山田市長の唯一の相談役であり顧問役であつたが、更に歴代市長の政策を輔けて愛市の至情益々深く、市政の爲には全くその勞を厭はず、自己の犠牲を毛頭惜しまずして、行住坐臥たゞ清水市發展に思ひを注ぎ、一貫の至誠を致されたのである。二代市長に塩原時三郎氏を推薦する際には、同氏が臺灣總督府に在動中であつた爲、他の議員數名と共に遙々渡臺して熱誠其の承諾を懇請し、又三代市長に時の助役大石惠直氏を昇格するに就ても、四代山田市長推薦に際しても、常に中心力として圓滿に善處し、實に鮮かなる名議長の貫祿を示されたのであつた。平素格別責任感が強く、幾多の會社經營や萬般の

事に全く寸暇も無いのに、市會の爲に必ず萬障を排して出席し十六年間の長き年月、副議長に代行させたことは僅か數回に過ぎない。而も公務上遠方へ出張するのに殆んど費用辨償を請求する事なく、公事の爲に私費を投じた額も精算すれば莫大な數に上るであらう。同僚市會議員中にも陰に陽に面倒をかけられた者相當多く、誰にもよく深切を施し慈父の如く仰がれたので、如何なる場合でも氏の在る所必ず圓滿に事の解決を見ないものは無かつた。全く人格皎潔で愛市の熱意に燃えて居たので、全市の輿望を一身に荷ひ嚴然偉大なる存在として江湖に名議長と謳はれたのである。

昭和十二年四月には全國市會議長會より、市會議長勤續十三ヶ年の功勞に對して表彰されたが、氏は此の榮譽を同僚に分つべく、其の後自ら物故市會議員の追弔祭を執行して、その靈を慰め遺族に謝し、尙第一回以來の現存市會議員を招待して慰勞感謝の盛宴を催された事は、洵にその厚き情誼と謙讓な徳とを物語るもので、奥ゆかしくも美しき限りである。



縣會議員初期當選の頃
(大正八年三月七歲)



頃の長議會縣
(歲八十四年五和昭)

二、縣政に對する貢獻

六代目與平襲名後二ヶ年を経た大正八年九月には、地方の要望に依つて縣會議員總選舉に出馬する事となつた。當時政黨の華やかな頃で、黨人に非ざれば政界進出の覺束ない時代であつたから、氏は黨籍を立憲政友會に置いてその公認候補者として立つたのであるが、それも決して自發的の立候補でなく、無理推しに薦められて已むを得ず出馬した譯である。その頃政民兩黨の政争は頗る深刻を極めたのであるが、夙に徳望を郷黨に繋いで居た氏は、初陣を見事に當選して縣會議員となり、爾來縣政に參畫して縣民の福利増進に力を注ぎ、大正十二年十月の總選舉に再び當選して愈々縣政界に重きを加へ、昭和二年十月には三度當選して縣會の長老となつたが、謙讓以て樞要な役割を他に薦め、昭和五年十一月に至り各派一致の推薦に依つて縣會議長に就任し、縣當局と議員との仲に立つて公正克く縣會の運営に當り、昭和六年の秋満期を機に議員を辭する迄、實に十二年間引續き縣治に盡瘁されたのであつた。

氏は政友會員であつても胸底頗る黨色には淡白で、清水港開發の爲には自己の黨籍を墨守したり拘泥するの要も無いと云つた風で、全く郷土の利害を慮つて黨籍に身を置かれたのである。三期間に互り議員として縣政に貢献された事は多大であるが、此の間築港問題其の他清水市の發展上、斡旋盡力せられた功績も亦極めて顯著なるものがあつた。

◎ 表 彰

昭和九年二月紀元節に、自治功勞者として、静岡縣知事より表彰せらる。
昭和十四年八月、多年縣政に功勞ありし故を以て、静岡縣知事より表彰せらる。

三、 貴族院議員に勅任せらる

多年市政、縣政に參畫貢獻して聲望信倚愈々厚く、實業界に活躍寄與してその重鎮となり、卓見達識と高邁圓滿なる人格とは益々衆望を荷ひ、遂に從來の

辭退も重ね難く、山田市長はじめ各方面の熱誠なる推舉を容れて、昭和十四年九月の貴族院議員多額納稅者議員選舉に出馬し、激戰場裡に絶對多數をもつて目出度く當選して同月二十九日付、貴族院議員に勅任の光榮に浴されたのである。

因に此の選舉は定員二名に對し立候補三名で競争も激甚を極めたが、有效投票百九十二票中斷然九十一票の絶對多數を得て當選した事は、全く平素の徳望に基因するもので氏の人格が克く之を然らしめたと謂ふべきである。唯々惜しむらくは、其の後間も無く二豎の爲に聖路加病院に加療の已む無きに至り、遂に中央政界に活躍を見る術も無かつた事は返すくも遺憾の極みであつた。

第六章 清水港發展に對する業績

一、開港の沿革

清水港は現在輸出入貿易總額年五千萬圓に達し、全國第八位の貿易港として、亦綠茶、罐詰、蜜柑等の輸出港として、その名聲は天下に知られて居るのであるが、今日の盛況を招來する爲には、過去に於ける幾多郷土人の非常なる苦心と犠牲とが拂はれてゐる事を忘却してはならない。

抑々本港發展の淵源は茶の輸出に在つて、製茶事業と深い關聯を持つて居るのである。天與の氣候風土に恵まれて、静岡縣の製茶事業は明治初年の頃から夙に獨壇場の盛觀を呈し、その輸出は悉く横濱港を経由することになつて居た。随つて豊富な製産品は東海道線に依り、或は汽船の便に托して態々横濱に回漕せねばならないので、其の運賃だけは全く餘分の負擔となる譯で

あつた。若し之を清水港より外國に直接輸送する事が出来れば、即ちそれだけの經費は悉く之を製品改良費に、或は販路獲得の經費に充當せられ、應て外國市場に於て、支那、印度等の強敵を驅逐するの用になし得たのである。この邊の消息は明治二十四年二月、清水町中井俊之助氏外十名の連署に依つて貴衆兩院に提出せられた、清水港を特別輸出港とするの儀に付ての請願書に記載されてゐるが左にその一節を抜萃すれば、

「……米穀の輸出より論ずるも清水港を特別輸出港たらしむる要切なること此の如く大なり。而して某等の特に熱望する所は決して之に止まらず、本邦輸出品の最要部を占むる所の製茶を以て特別輸出品に加へ、之を保護獎勵して外國市場に雄飛せしめ以て我國一大富源を求むるにあり。抑々製茶の輸出は年一年に増加して、我國輸出額中大部分を占むるに至れりと雖、近來外國市場に強敵多く、支那、印度の製品は殆んど我が製茶を壓するの傾きあり。當業者は大いに憂慮して頻に販路を他に求めんと欲し、或は貿易市場の競争

策を講じ遂に日本製茶會社の組織あるに至れり。若し之が保護の策を講ぜんとならば、特別輸出の方法に依り、或は其の他の手段を設けて運送費を減ずるを得せしめ、市場の茶價をして低廉ならしむるを得ば、外國市場に競争者多きを恐れず、販路益々擴張し生産愈々進歩して當業者を保護獎勵するの道是に於てか始て顯著なるを得ん。加之、米、麥、麥粉、石炭、硫黃の如きは、如何に外國輸出を獎勵するとも我國の産出限りあり、特に米、麥の如きは年々豊凶ありて、或は却て外國米を輸入するが如き時なきに非ず、設ひ然らざるも年々多額の輸出をなし、以て我國貿易の利を期すること頗る難しとする所なり。然るに製茶の如きは、大いに之に反し、需要に伴つて多々益々給するを得べし。故に今製茶を特別輸出品中に加へ、以て殖産交商の進路を易からしめば、富國の策蓋し讓る所なかるべし。抑々本縣製茶産出額は横濱貿易市場に於て殆んど其の半額を占む。以て本邦産出の最多額地たるを知るべきなり。然るに従來の如く本縣より汽車若くは汽船の便をかりて横濱市場に回送し、多額の運搬費を要するは、之が爲茶價低廉なる能はず、爲に外國市場の競争に勝を制する

こと能はず、従つて生産輸出共に十分進歩する能はざるなり。今試みに明治二十三年本縣製茶産額と汽車運賃表とを示し、且つ縣下各地より江尻停車場に運搬し直ちに清水港より輸出せば、其の運賃の差幾許なるや表明せん。

(都市別産額、哩數、運賃、運賃差額表、記載省略)

今若し鐵路によらずして直ちに清水港より輸出するの曉に至つては、運賃に於て多額の費用を減ずるのみならず、製茶を再製して外人の嗜好に適せしむるの事業も之を本縣に於て起すことを得、年々四十有餘萬圓の再製費の如きも横濱の傭賃不廉の人夫を使役すると、清水地方の低廉なる人夫に比較すれば、其の差異莫大にして益々生産者の利益を保護するを得、製茶輸出を増進するや疑ひなかるべし。況や且つ多額の貨物を登載して函嶺の嶮路を攀づるは、鐵道經濟に於ても不利大なるべければ、益々清水港を以て東海輸出品の門口たらしむるの切要なるを信ずるなり。

以上述るが如き事理あるを以て、某等不遜の罪を顧みず敢て請願書を、貴族院衆議院長閣下に呈し、某等の願意を聽許せられんことを懇願す……

更に第二次請願は、明治二十九年七月二十七日付、鈴木與平氏(先々代)外十五名の連署に依つて行はれ、清水港をして外國貿易場とせられんことを貴衆兩院議長内務、大藏兩大臣に懇請したのであつた。

斯くの如く清水港は、明治二十三年帝國議會開設以來、地元委員諸氏の熱烈なる運動に依つて、或は請願に、或は陳情にあらゆる手段を講じたその努力が酬いられ、遂に明治二十九年勅令第三百六十號を以て開港外貿易場に指定せられ、更に日清戰役後の國力發展に乘じ、地元民の熱心な運動に促されて、明治三十二年八月に至り、勅令第三百四十二號を以て純然たる開港場に指定されたのである。

かくて漸く開港場に指定されたもの、從來横濱港から輸出して居た茶を清水港より北米に直送することは容易なことではなく、暫らくの間は日本郵船會社で貨物船を清水に入港せしめ、一旦横濱まで運搬し更に此處で北米向の汽船に積み替へて輸送する方法を繰返すの已むなき状態であつた。蓋し外國航路の船舶を清水港に寄港せしむるには、残念ながら相應の荷物が無い

ので、強ひて之を斷行するには荷物取扱者も荷主も多大の犠牲を覺悟し、船會社も亦相當の犠牲を忍ばねばならない爲であつた。當時の條件は清水に於て毎船茶三百噸を保證すること、十五時間以内に積込みを完了する事等であつた。この間に在つて地元關係者は大いに奔走し、荷主取扱店の結束協力を圖り、多額の犠牲を覺悟して茶の直送を試みたが、實にその先鞭をつけたのは故人の先代鈴木與平氏であつた。而して日本郵船の永井支店長は之に對して大いに後援盡力せられたといふことである。かくして第一回の直送船、日本郵船會社の神奈川丸が多量の茶を積載して、目出度く清水港を出帆したのは實に明治三十九年七月であつたのである。

次で翌四十年には、清水港の茶輸出量は七百四十八萬封度に上り、爾來輸出は順調に進展して大阪商船、東洋汽船等の船舶が競つて入港する様になつた。

二、港修築の努力

清水港は前述の如く明治三十二年八月開港場に指定されたが、其の後明治

四十年十月に至り内務省より第二種重要港灣に選定を受け、愈々その重要性を増加したので翌四十一年、李家知事は縣會の決議を経て工費四十四萬五千二百餘圓を五ヶ年繼續支出と定め、明治四十二年五月に港修築の工事を起された。その程度は數回の調査測量に依つて、現在並に將來の貨物數量を達觀し計畫したものであるが、工事は頗る經濟的であり小規模のものであつた。即ち水底の淺所を浚渫し小船、舢舨等の荷役を利することに意を注ぎ、浚渫によつて得た土砂は一定の棄場を水面に劃して之に留棄し、浚渫工事の進捗と共に一方自然に漸次埋立地を得る計畫であつた。この工事は大正三年に至つて完成を遂げたのである。

而し本港は縣下第一の要港であり、横濱、名古屋兩港の中間に位し、後背地域の發展は益々出入貨物の激増を招き、年と共に港の不備を痛感するに至つたので、縣は更に之が修築を計畫し工費五百五十萬圓を豫算に組み、内半額の國庫補助を申請した所が政府も其の必要性を認め、大正十年度より六ヶ年の繼續事業として大正九年帝國議會の協賛を經、工事は内務省の直接施行となり、

大正十年に第二次修築工事を起されたのである。爾來國縣財政の都合と港運の消長とに依つて幾多の變遷はあつたが、大要左表の如き經過を辿つて竣工を告げ、遂に今日の清水港を成すことが出来た。

工 事 期 間	工 費	進 行	備 考
自大正十年至昭和九年	五、五〇〇、〇〇〇圓	完 成	静岡縣工事
同	四八五、〇〇〇	同	鐵道省經營岸壁工事
同	六七七、〇〇〇	同	縣營貝島埋立工事
自大正十五年	二、〇〇〇、〇〇〇	同	陸上諸設備
自昭和二年	四五〇、〇〇〇	同	貯木場
自昭和四年至同九年	一、八〇〇、〇〇〇	同	帝國議會の協賛を經たる擴張工事
自昭和六年至同八年	四六〇、四六九	同	震災復舊工事
自昭和十年至同十一年	一、二八〇、〇〇〇	同	第二次震災復舊工事
自昭和十年至同十一年	二四〇、〇〇〇	同	帝國議會の協賛を經たる擴張工事
計	二二、八九二、四六九	同	

而してこの第二期工事期間、氏は殆んど縣會議員在職中であり、又市會議長

の要職にも在つたので、港修築工事の發案並に進捗に關して、陰に陽に如何程奔走盡力されたかは想像に難くない。即ち大正八年九月以來昭和六年まで滿十二ヶ年間縣會議員として活躍し、一方大正十三年五月以來引續き滿十六年間市會議長として市當局と協力し、克く該工事の實現運動に熱誠を捧げられたのである。

顧ふに氏は東海に於ける政友會の重鎮として衆目に見られては居たが、自身的心境としては實業界に活躍する者として一黨に偏すると云ふ考へは尠かつた。殊に清水港の開發は單に自分の郷土を開進するに止まらず、やがて静岡縣の産業を振興せしめる所以であり、清水が東海の良港として天恵を遺憾なく發揮することは畢竟國運の隆昌に寄與する所以を確信して居られたので、清水港育成の大事業は、政黨政派の如何を問はず縣民一致して之に當るべきものと考へて居られたに違ひ無い。されば港都清水の建設を念願して政黨に拘泥せず、縣會の圓滿なる協力を顧念して終始渝ること無く、その三期間に互つて縣會議員として充分な財力と立派な人格徳望とを兼備しながら、

尙且つ議長の榮職に就いたのは唯々最後の一年間に限つた事を考へても、常に縣會の榮職の如きは他に譲つて只管和衷協力を策り、地方の福利の上に主力を傾注された貴い衷情が偲ばれるのである。

今や一萬噸級の汽船が岸壁に巨體を並べて横付けになる盛觀を見る時、貝島の埋立地に大工場の煙突を仰ぐとき、躍進清水港を祝福しながら、坐ろに氏の隠れたる偉大なる努力功勞を思はずには居られない。

三、工場誘致の努力

最近清水港に日本輕金屬株式會社、鶴見窯業株式會社、日本發送電火力發電所、東亞燃料株式會社、其他各種の國策會社、大工場が續々建設され、東海の大工業都市を現出せんとして寔に前途洋々たる發展を約束されてゐるが、之等工場設立が亦清水港發展の上に重大な役割を演じて居ることは言を俟たない所である。

從來清水港沿岸に工場を誘致する事は市民多年の宿望であつたが、工場用

水の乏しき爲に其の意を得ず、曩に東京人絹、日本製粉、富士紡關係織維工場等が好意を示して敷地を物色した事も度々あつたのであるが、用水不足の關係で事止みに終つた。而し日本輕金屬會社は支那事變中でもあり、軍部の後援する重要國策會社でもある爲に、縣として積極的にその工場誘致に盡力し、大英斷を以て工業用水を縣營事業とし、静岡より安倍川の水を供給することに、縣市一體の大努力に依つて工場誘致に成功したのである。最初日本輕金屬工場は北九州方面に有力な候補地があり、地價も安く原料も九州で加工して半製品を蒲原工場に運搬する方が運賃が低廉であり、又石炭の供給も北九州は豊富である爲に種々の好條件から悔り難い候補地であつた。然もそれを克く清水市に誘致し得たに就ては山田市長の熱意手腕に依るは固より、之を後援協力して熱心に奔走された故人の力も亦實に與つて大なるものがあつた。其の他の工場誘致に對しても常に市長と協力し、陰に陽に非常な努力を拂はれた事は申すまでも無い。

縣營埋立地は多年静岡縣の痛として始末を憂慮された時代もあつたが、工

場敷地に買収されて頓に縣の財政事情も好轉した譯で、この交渉が成立を見た時、氏は沁々と「これで漸く縣民に對しても市民に對しても肩が軽くなつた」と述懐されたといふ事であるが、その責任感と献身的努力とは眞に尊いものと謂ふべきである。

四、殖産興業に對する貢獻

現今清水市の重要産業の一として、製材、製函業が盛況になり年産六百萬圓を超え、工場も約五十を數へてゐる。これは固より天與の良港に負ふ所極めて大なるものがあるが、その發展の歴史は決して坦々たる道程を辿つたものではない。

清水港に木材が移入せられた事は、初め富士郡大宮附近の富士製紙會社に原料を供給するのが主目的であつた。元來同地方の製紙業は富士山麓の豊富な森林に依存したのであるが、その大部分が伐採し盡されると北海材、樺太材を清水港より移入せざるを得なくなつたのである。斯くして木材の移入が

年々増加して來たが大正十二年關東大震災の突發に遭ひ、震災復興計畫の樹立に伴つて木材の需要は頓に増大したのであつた。之を契機として北洋材の供給に利便なる清水港は漸く製材業者の注目する所となり、島田町方面より多數業者の轉入を見たのである。かくて業者の不屈不撓の努力と天然乾燥に恵まれた好條件とに依つて、清水北洋材製品は全国的に好評を博し頗る順調に發展して來たのであるが、偶々昭和七年樺太廳林政改革に依る木材島外移出制限に遇つて原木の不足や價格の昂騰を來し、製品の市價之に伴はず、業者は非常なる苦境に陥つたのである。

この窮狀を見た氏は、自身製材業に關係は持たなかつたが、誠心誠意よく業者を激勵し、君達はよろしく内地ばかり相手とせず、眼界を大きくして輸出を計り、須らく外貨獲得に邁進するがよい。海外の販路は諸君の努力に依つて無限である」と頻りに力説された。その後當業者の勇往不撓の努力は遂に難局を突破し、内地材の移入も徐々に増加し、製品は臺灣、朝鮮、滿洲を始め支那南洋まで販路を擴張し、今日は滿洲國、關東州、北米合衆國、亞弗利加等へ多量の輸

出を見、益々活況を呈してゐるのである。

因に折戸灣内縣營貯木場は、木材移入量の激増に應じて昭和二年に、工費四十五萬圓を以て起工せられたもので、清水港と製材業に對する氏のかくれた業績は洵に大なるものがある。

又清水港と砂糖との關係に就て氏の寄與せられた事柄は決して忘却することは出来ない。今清水港に砂糖倉庫が在つて静岡縣民の消費する砂糖は悉く此處に陸揚げされるのであるが、曩に清水港の不況時代、氏が時の藏相井上準之助氏を説いて特に保税倉庫を設置して貰つたものである。即ち以前は縣民消費の砂糖は、東京若しくは名古屋に陸揚げしてから轉送を受けて居たのであつた。然し不況時代には清水港としては少しでも貨物の入港を計り、港灣勞務者の仕事を増加することを工夫しなければならぬ。そこで着目したのが縣民の消費する砂糖の清水港陸揚げであつた。氏は早速上京して大藏大臣井上準之助氏に面接を求め具さに之を陳情したのであつた。ところが藏相の話に、砂糖を名古屋港に陸揚げしても、清水港に之を陸揚げして

も國家として見れば差引大した問題では無いとの事であつた。そこで氏はすかさず、國家としては大問題でなくとも縣民にとつては大問題であり、若し名古屋、東京からの鐵道運賃だけ負擔が輕減出來れば、縣民は結局一斤について一錢何厘か低廉に砂糖を使へる譯になると縷々詳細な計算を示して力説したので、流石の藏相も即座に許可を與へたといふ事である。

惟ふに港の貨物増加は同時に清水の發展であり、港の勞働に従事する人夫の生活を安定せしめる所以に外ならない。港の衰退は直ちに貨物の減少であり、仕事の減失であつて、彼等の生活を脅威する事になるので、氏は常に思を是に輸し眞劍に憂慮して居たのであつた。

清水市内の罐詰工業は創始以來僅々十年間に刮目に値する發展を遂げ、今年年産三千萬圓、輸出一千萬圓に及んでゐる。抑々氏が罐詰工業に着手した動機は當時不況の眞最中にあつて、地方の女子に一つの職業を與へ、失業防止の一助とすると共に、輸出の振興をはかり得たならばとの考へから出發したものであつた。最初縣立水産試驗場から鮪油漬罐詰の研究が齎らされ、その

有望性を強調せられた當時、魚の事は専門外に屬するので其の方面の人達に譲り度い意向であつたが、その頃トンボ鮪が非常に低廉で三錢も出せば刺身一皿買へる時代であつたので、之に加工して外國に輸出する事は外貨獲得の上から見ても頗る有意義であり、且つ又之が爲に婦女子に仕事を分與する事が出來れば、雖て港の勞働者の家庭も潤ふ事になるといふ利他公益の念慮から斯業を開始したのが、その真相であつて、鮪罐詰工業が現今の如き隆盛を現出する事は、當時夢想だにしなかつたといふ事である。今日氏の爲に如何程多數の人が餘恵に浴してゐるか知れない。

五、公益優先の信條

今や我が國未曾有の重大時局に直面し、頻りに國內新體制の確立が叫ばれ、自己の榮達や利潤の追求に専念する自由主義を清算脱却して、飽く迄公益優先の思想を要望せられる秋、氏の如きは夙に率先好範を垂れ、先覺卓見、而して常に己れを後にして公益を先とし、世の爲人の爲に誠意を捧げて渝らなかつ

た貴いその業績と徳風を偲ばれて景仰の情洵に切なるものがある。

氏が居常堅く抱懐して居た信條は、一切の事業總べての行藏は之を擧げて公益を廣め世務を開くに在つて、苟も事に處して私利私慾に發足すること無く、他の喜悅を己が満足とし、全く感謝感恩の生活に終始されたのであつた。二宮尊徳先生の教訓に、鹽水は向ふへ押せば前に戻ると在る如く、清水港發展の爲に寢食を忘れて盡くし、郷土の開発、國運進展の爲に幾多の事業を企て、殖産興業に依つて世を益し、地方の惠浴を招かうと思念した事が、結局徳孤ならずで、纏ておのづから自家の繁榮に餘慶を齎らす事が出来たのであつた。其の終生私益壟斷の考へは毫末も無く、全く公益優先の信條を貫かれたと謂ふべきである。氏は常に店員や知人に、決して眼前の利害に拘泥せず、清水港の發展に盡力し遠大なる前途を見透さなければならぬと諭すを例として居た。されば時に自分の營業に不利となり、或は難問題が降りかゝることを豫想されても、それが地方公共の爲になる事なら快く之を援助もし、その實現に深切誠意を竭されたのである。或年の秋、内田鐵道大臣が清水港を視察され



第二回同米の頃
(昭和九年五月二歲)

た時同行して岸壁に到り、清水港開發の爲に是非共速かに鐵橋を架設して欲しい旨を陳情された。その時鐵相の隨行が「巴川へ鐵橋を架けるとガントリー・クレーンを備へ付けるから貴下の仕事は失くなりませよ」と笑つて言はれた。即ち鐵道省で使用する石炭を本船から陸揚げする鈴與商店の仕事が、若しガントリー・クレーンを備へ付けると機械力に依つて石炭を積み込むので、炭價が著しく低廉になるのである。而し之に對し平然として「その爲に石炭が廉くなるのでしたら喜んで失業します」と言つて笑つたといふ事である。

第七章 教育教化に對する業績

一、精神生活

少壯の頃より夙に精神修養を心懸け人格の鍊成に精進し、真理の堂奥を覗いて信仰に生きようと力められた。東京遊學時代に内村鑑三氏の感化を受け、相當深くキリスト教的信仰生活に這入られたのであるが、後年に至り信仰の推移を見る様になつた。清水市内の基督教會に對し夫々内面的援助を與へられたのも前述の關係に因由する所が多い。鈴木家に迎へられてからは令室昌子夫人に依つて漸次佛教に接近し、椎尾辨匡博士の提唱さるゝ共生主義に頗る共鳴し、店是をも「ともいさ」と定め、熱心に法話を聴き、店員にも力めて之を傾聽する機會を作られた。更に又山邊習學氏や友松圓諦氏を聘して屢々講演會を開き、佛教の眞髓に觸れて歡喜合掌の境地を拓かれたのであつた。

而しその修養法式は決して一方に片寄ることなく、禪堂に靜坐するとか、一派に没入するといふ風でなく、苟くも精神の糧になるものは飽くまで虚心坦懐に之を迎へ、克く道を求めて心を磨き、悟道法悦の境地に達せぬまでも、自然に順應して淨く正しく人生を送り、懼れず悲しまず慌てず惱まず、來る日來る日の生活を感謝合掌の態度で過ごさうと、不斷の心構へを持續されて居たのである。己れを持する事かくの如く而して率先好範を示すと共に、先づ店員の精神向上に思を輸して、人格修練の方途を講じ、更に教育教化の重要性を深く念頭に置かれて、學校教育に社會教化に、格別の熱意を持たれ、助成盡瘁の勞頗る大なるものがあつた。

二、店員の教化

多數の若き男女店員に對し常に精神教育に留意して、その修養施設を講じ、先づ至誠會を結成して毎月相互の親睦、精神修養を圖り、或は社會生活の常識を涵養して銳意店員の人格向上に力を注がれた。會報の題字「至誠」を望まれ

て數十枚も練習し漸く書き上げたといふ話が残つてゐるが、如何にも魂を打込まれる眞摯な態度が偲ばれて、ゆかしさを覺えずには居られない。又、店員を執務開始前、朝のお勤めに集めて、必ず「共生のお勤め」を一章づつ朗誦せしめ、斯るひとときに自然と店員の人格向上、處世の大道を思念させたのであつた。この行事は最近に至り多少の形式を變へはしたが、十年に亘つて繼續され、今猶店員の重要な日課の一つとなつてゐる。

尙店員のため佛教講演會を開き、山邊習學先生、椎尾辨匡先生、友松圓諦先生の諸師を、或は政治經濟の専門家を招聘して屢々講話を聴かせ、その都度一般有志にも案内して聴講を勸奨し、市民の一人でも多く精神の啓發されることを喜ばれた。

平生店員に對して訓示らしい事は一切言はず、たと元旦と賞與日にのみ挨拶として何か所感の一端を述べる程度に過ぎなかつたけれども、その一言は誠心誠意そのもので、常に同志同行の立場に身を置き、自分も修養しながら店員にも修養を勧められた事は實に敬服に堪へないものがある。その店員に

接するや恰も慈父の如く、百事寛容徒らに他を咎めず、溫顔愛語を以て懇切に導かれたので、衆心悅服敬仰して感染風化ののづから成り、店員の氣風も美しく協心一致、職域奉公の道を勵むのであつた。鈴與商店が、今も尙店員の修養施設を怠らず醇風美俗を醸成してゐる所以は、故人の人間育成に對する熾烈な熱意に因るものと謂ふべきである。

三、社會教化に對する盡瘁

夙に郷黨啓發の爲に社會教化の極めて重要な事を慮り、この方面に深甚なる關心を持つて陰に陽に随分寄與する所が多かつた。

屢々精神教化の講演會を自店に開催して、之を一般に聴講させた事は既に前述の如くであるが、更に佛教會の行事其の他教化に關する各種の事柄に就いては、常に快く相談に應じ積極的に援助を惜しまなかつた。

一般民心の教化善導に對し不斷の關心を持たれたが、格別に世に恵まれざる者に對する心遣り厚く、かゝる人達には物心兩方面より盡力して安住を求

めさせようと心掛け、不遇或は思想上より罪を犯して法に問はれた人々が、やがて其の非を幡然と悟つて再び世上に出た際、冷き社會の眼に容れられずして心荒び、勢ひの趣くところ遂に又犯罪を敢へてする實情を憐んで、之が保護教化に非常な努力を注がれた。

昭和四年十二月に清水市社會事業協會が設立されると其の顧問に推され、熱誠以て事業の進展に盡くし、物質的にも精神的にも非常に寄與されたのであるが、特に生活困難の人心に及ぼす影響を憂慮せられ、その家庭を懸念して毎年末には方面カード登録世帯二百乃至三百五十戸に對して、のし餅、鮭、或は白米を贈つて心から慰藉するのであつた。

又同年大日本教化會清水支部が設立されると推されて顧問を快諾し、私財を投じて事業の遂行に盡力せられ、昭和十年に同支部が教化會を離脱して静岡縣司法保護聯合會に加盟して清新會と改稱した際、會長に就任し爾來献身的に奔走努力して銳意使命の達成を圖られた。因に、會名は時の鹽野法相が選んだもので、明朗清新の氣を表現すべく清新會と稱する事に決められたの

である。會長として事業に骨折つたことは並々でなかつたが、その經營に私財を投じた額も莫大なもので、平素かゝる文化施設に出資することは少しも惜しまれなかつた。

昭和十二年に縣聯合會主催の下に免囚保護事業の資金募集と趣旨普及の計畫が樹てられ、その方策として浪界の雄龜甲齋虎丸を聘し、各地に巡業を行つたが、その折も随分各方面に活動盡力せられ、當時伊東町に巡業中の虎丸が舞臺で急逝したとの訃報を聞き急遽弔問して懇ろにその靈を慰められたといふ人情の美しい挿話がある。翌年清新會自體の主催で、その資金募集のため同様浪花節興行を以て縣下を巡業したが、其の際、静岡、濱松、沼津、清水の四市に於ては自ら陣頭に立ち、満場の聴衆に對して深甚の謝意を表し、司法保護事業の重要性を説き多大の感動を與へられたといふ事である。浪花節一行の招聘に就ても二三千圓即金で前拂ひして而も後日、會より受取ること無く、又前賣券發賣に際しても自身奔走して沼津市に於ける如きは、自ら諸官衙各所を歴訪して豫定額を遙かに突破し稀に見る盛況を呈したのであつたが、如

何に教化事業に熱意を持つて居られたかを想像するに難くない。

由來刑餘の人は兎角前科者の悪名を刻まれ世人に白眼視され、自らも世を呪つて荒廢流離果ては身を容れる所もなく歸るに家なき憐むべき人達であつて、之を收容して温情に包み暖き衣と食を與へ適當の職に就かせて生活の安定を導く事は決して容易の業ではないが、これ程また當人更生の爲にも社會秩序の爲にも緊要なことは無い。されば清新會の例會には常に萬障を排して出席し、他の會合ある場合でも中途から必ず參會して親しく會員と膝を交へ夜の更ぐるまで歡談し、談笑の裡に感化を與へ、又被保護者の就職に盡力すると共に、収入少き爲生計の困難な者に對しては、實相を調査して待遇改善の斡旋につとめ、或は營業資金を貸與し、常にその罪は憎むもその人は憎まざる貴い人情をもつて、些少の疑念も無く率先自身經營の關係會社工場に就職せしめて生計の基礎を授けるなど、物心兩面に救済の温かき手を伸べられ、司法保護事業には格別の努力を注がれたのであつた。之が爲に今日立派な社會人となり、重大時局下に於て夫々職域に精勵し、奉公の實を效して居る者が

決して尠くない。

他面思想轉向者の保護誘掖に關する努力と功績は頗る大きいものがあるが、事柄が問題だけに世間には餘り知られて居ない。昭和十二年に清水市に於ける過激思想者が四十二名ばかり檢舉され、その内十二名は刑に處せられた事があつたが幸ひにも悉く轉向した。この年の六月四日に静岡保護觀察所保護司を囑託された氏は、清耕會を設立して轉向者の爲に何呉れと心配し、非常な努力を拂ひ毎月一日の夜は座談會を開催して指導誘掖の勞を執られた。その開會の劈頭常に「この席は鈴與も無ければ君等も無い、席の上下も階級も無い、たゞ腹を割つての座談會である」と言つて洵に謙讓懇切な態度で心底を吐露して語り、夜の二時三時に及ぶも厭はずに膝を交へて懇談する様は洵に菩薩の姿であつたと關係者に頌へ謳はれて居る。座談會中には如何なる重要な用件の電話が掛かつても絶対に中座するやうなことは無かつたとの事であるが、その眞摯な態度、教化せずには止まぬといふ堅い信念が察せられて感激に堪へないものがある。

◎昭和十四年四月静岡司法保護常務委員會參與、同年七月静岡地方裁判所人事調停委員、同年十二月静岡縣思想對策研究會顧問となり夫々寄與する所が尠くなかつた。

四、育英事業に對する貢獻

一家の繁榮國運の興隆が全く子女の教育に淵源する事を深く思念して夙に育英事業に力を注ぎ、静岡縣育英會に多額の資を提供して、その事業を援助すると共に役員として經營に參畫し、又個人として學資の乏しき子弟に援助を與へて進學修業の便を圖り、求むる所なくしてたゞその成徳達材を樂しみ或は教育機關の求めに快く應じて屢々各方面に寄附をなし、育英に對する助成に多大の熱意を示された。

清水中學校が創設される當時は、縣會で隨分位置の問題が論議されて相當困難な事情に立ち至つたが、この間に處して奔走頗る努め、遂に現在の所に一校新設となるに際し地方子弟の爲に喜んで出資し、更に同校圖書館建設にも

多額の寄附金を供して其の促進を助け、清水商業學校設立に際しても亦同様莫大の援助を致され、又、清水市立圖書館に鈴與文庫を寄贈する等、教育の爲には實に克く誠意を竭されたのである。

日頃寸暇も無く社會活動を續けながら、胸底不斷に令息達の教育に細心の留意をなし、慎重に詮衡して家庭教師を選び、殆んど總べてを委せて其の善導に信賴すると共に、他面世の父兄として責務を果すべく、或は静岡中學校保護者會の役員に推されて同校進展の爲に盡瘁し、或は地元清水小學校の保護者會長として十有七年の長きに亙り學校の施設を助成し、其の盡力の功は洵に大なるものがあつた。殊に教育者尊重の好範を示され、教職員に對して常に敬意を表し、鄭重に應接されたことは、全く教育愛護の至情に基づく表はれであつて、令息達の世話になつた恩師に對しては衷心より謝恩の誠意を捧げられた。

静岡中學校の卒業式に臨んで父兄代表として謝辭を述べられた一節に、子を持つて知る親心といふ諺があります、私は今日の卒業式に當つて全く子

を持つて知る師の恩といふ感じを深くしたのであります」と申されたといふ事であるが、師恩感謝の念に厚い氏の面目躍如たるものがある。令嗣の結婚披露式に舊師を招待して喜びを分たれた事も、この邊の消息を物語るものとして寔に奥床しい。

大正十三年二月十一日に清水市制が敷かれて六ヶ町村が統合されると、學校關係の融合協力を圖つて一途に教育の振興を期する爲に、清水市教育會を組織する事になつたが、初代の會長として人格識見といひ社會的地位といひ總べて申分の無い氏に懇請することは當然の事であつた。而し謙讓な氏は容易に引受けず他を推奨して居たが、會員一致の熱烈な翹望に動かされて漸く受諾し、同年四月に會長となり、爾來十有六年の間熱誠以て會務に盡力されたのであつた。清水市教育會は寔に得難い名會長を戴き、會員孰れも其の崇高な人格を謳歌し一致協力事に當つたので、會運年と共に進展し圓滿に健實な教育を建設する事が出来た。會長として在職の間克く役員や會員の意見を尊重して出来る限りその實現に努め、或は學童の保健養護を考慮して臨海

學校を三保海岸に開設し、學校看護婦の設置を助成し、或は専門家を招聘して教育研究會を開き、教員の縣外視察を実施して見聞を擴め、或は毎年市内各學校の卒業式に臨席して祝辭を呈すると共に優良學徒を表彰する等、教育振興のために寄與する所が多であつた。教育會はこの偉大な會長に依つて全く微動だも無く、會員は齊しく誇りを感じて居たのである。

蓋しその高邁皎潔なる人格と卓拔なる識見とは教育者の以て示範となり、無言の裡にも感染風化を與へ、敬愛の交流する所あるのづから會員の發奮努力を生じたと謂ふべく、創立以來十六星霜の間誠心を披瀝して教育會に寄與された功績は實に偉大なものであつた。

◎昭和十五年四月清水市教育會より左の感謝狀を贈られた。

感謝狀

大正十三年四月本會創設以來十有六年ノ間會長トナリ地方ノ自治産業等幾多要職ニ在ルノ身ヲ以テ終始一貫熱誠其ノ重任ニ盡瘁セ

ラレ市教育ノ振興に貢献セラル、所寔ニ大ナルモノアリ仍テ茲ニ
記念品ヲ贈呈シ謹ミテ感謝ノ誠意ヲ表ス

昭和十五年四月二十九日

清水市教育會

會長鈴木與平殿

第八章 銃後支援の赤誠

一、皇軍感謝の生活

夙に護國の軍人に對する感謝の熱意は人並以上で、常に將兵の勞苦を偲び、
せめても自分の力で出来る事は眞心こめて報謝の實を效さうと不斷に心掛
けて居られた。事は當然に似て而も決して氏程の熱誠を實現することは容
易で無い。出征兵の歡送に雨の晨、風の夕、暑い日も寒い日も如何なる時でも
驛頭にその姿の見えないことは無く、幾多の要職に在つて洵に匆忙繁劇席の
温まる暇も無いのに、出征兵士の見送は斷じて缺かすことは無かつた。縱令
特別の來客と要談中でも時計を注意して居て、「一寸失禮します、只今出征兵を
見送つて参りますから」と立たれ又、面會を求められると、「何時何分出征兵を見
送つて参りますから其の後にどうぞ」と言つて必ず驛頭の歡送を勤められた。

數知れぬ要件を控へ各種豫定事項の中にも先づ以て出征兵の見送、英靈の出迎を第一に置かれた。されば晨に上京して商用を済まし、夕に名古屋へ急行して翌日の會議に臨み、小憩の暇も無く其の夜静岡へ歸つて英靈無言の凱旋を迎へた事も屢々あつた。その誠意の熾烈なること洵に察するに餘りありと謂ふべきである。満員の三等車に立ち續けて随分疲勞を覺える際でも、戦地の勇士を偲んで上級車や寢臺車に乗らず、事變中は三等車でと言つて隨行の勧めを容れなかつた。多忙の連續で萬一身體に障りがあつてはと、家人や店員が二等車や寢臺車を勧めても、常に軍人の勞苦を思ひ敢へて三等車に甘んじて居られた。又自動車で驛へ急ぐ場合も應召兵送りの行列を横切る事は勿論、追抜く様な事は慎しみ必ず迂回して驛に出られた。平素餘り筆を手にする事は無いが、應召兵の爲に日章旗に揮毫を依頼されると非常に快く執筆され、又、歸還兵が挨拶に見えるると如何なる多忙の際でも應接間に案内して應對もし、衷心より積日の勞苦を感謝するのであつた。更に出征軍人家族に對しては格別の關心を持たれ、その家庭を察して何かと心配されたのである。



影撮ての捕虜家御に念記年十三婚結
(日三十二月二十年八和昭)

が斯くの如き感謝の熱誠は、雖て軍事後援の業績に顯はれ、郷黨の感激措く能はざるものがあつた。

二、支那事變前の軍事後援

大正十四年六月、帝國在郷軍人會清水市聯合會顧問に推されて以來、引續き軍人會の事業を熱心に後援された。昭和三年の濟南事件及び昭和六年の滿洲事變に際しては區内並に關係應召兵に對して親しく各戸を歴訪し、餞別を贈呈して懇ろに激勵されたが、特に店員關係の出征兵家族に對しては夫々毎月扶助金を支給して後顧の憂ひ無からしめ、慰藉激勵の範を示されたのであつた。又現役兵の入營、入團に際しては區内洩れ無く各戸を訪問して餞別を贈呈し、必ず驛頭に之を見送られた。軍隊の演習、行軍、宿營、或は軍艦入港等の際は最善の便宜を圖り、慰問歡待に入費を惜しまず、心から誠意を披瀝されたが、將兵亦その熱誠に感銘して禮狀常に山をなし、或は之が機縁となつて交通を繼續する幾多の將兵があるに依つても、如何に軍事後援の熱意が溢れて居

たかを察せられるのである。昭和十一年に静岡縣國防協會が設立されると率先之に入會し、巨額の資を寄附して大いに事業の達成に助力せられた。

三、支那事變と軍事後援

昭和十二年七月七日に支那事變が勃發し同月十五日、第一次動員令が清水市に下つて多數の應召兵を送ることになると、爾來令夫人と共に一家を總動員して軍事後援に當り、令息並に重役を始め店員一致協力してその任務を分擔し、不斷の活躍盡瘁は蓋し銃後支援の模範とするに足るものがあり、市民をして深く感激させた。

先づ應召軍人に對しては全市に亙り各戸を歴訪して餞別を贈呈し、而も終始渝ることなく、既に夫れも巨額に達してゐる。訪問激勵に就ても力めて自身で出向き親しく之を行はれたが、餘り廣範圍に亙つて多數の應召兵の出る場合は、手別けして必ず一戸も洩れなく實施されたのである。

應召兵の出發に際しては清水又は静岡驛に於て晝夜の別なく必ず之を見

送り、三島、濱松、名古屋、東京方面より出發する關係者に對しては夫々店員を派遣して餞別を贈り激勵を加へられた。

戦傷兵慰問の爲には親しく陸海軍病院及び療養所を訪れ、慰問品を呈して銃後の誠意を披瀝されたのであるが、其の訪問範圍も實に廣く、岡山二回、廣島二回、名古屋五回、豊橋三回、濱松五回、東京七回、三島四回、高崎、下田、吉奈、湊各一回、伊東二回、熱海三回、静岡三十餘回の多きに達し、その入費も莫大な額に上つてゐる。

出征軍人に對しては慰問状を送ること數十回、その數實に三千餘通、慰問袋を送ること四十餘回、その數五百餘個に達し、個人單獨の慰問としては稀に見る所である。この慰問状や慰問袋の發送に就ても必ず細心の注意を拂ひ、宛先を精査し夫々内容を吟味する等、極めて多忙の裡にも格別に精神を罩められたので、戦地の勇士も頗る喜ばれ、その禮狀が毎日二十數通を下らない有様であつた。

戦死者の遺族に對しては公報を聞くと直ちに弔問して懇ろに之を慰め、香

奠慰藉金或は花輪供物等を贈り、又、益や彼岸に墓參を缺くことが無かつた。應召軍人の武運長久祈願の爲には毎月一回店員の全部をして夫々遠近の神社に參拜せしめ、自身も亦之を怠らなかつた。

更にまた、事變關係の爲に町費を特別補助し、或は清水市軍事後援維持會の設立に際し率先して經費を負擔し毎月二百圓宛醸出する等、全く銃後の赤誠を吐露されたものである。店員の軍事献金に對しても常に之を補助し、或はその出征兵家族六十餘戸に對して毎月夫々扶助金を與へ、又勞務者三百餘家族に對して歲末の慰問金を贈り、病氣又は天災の際は篤と之を慰問して優情を披瀝し、多大の感激を覺えさせた。又傷病兵や英靈の清水驛を通過する際はよく之を送迎し慰問に敬弔に眞心を注がれた。

銃後支援の爲に支出された費額は相當大きなものであるが、別に静岡縣軍事後援資金に率先巨額の寄附をなし、或は日本赤十字社静岡縣支部傷兵娛樂場建設の爲に出資するなど、軍事關係の事業には快く寄附を行はれた。

其の他氏が軍事後援に寄與されたものは枚擧に遑なき程で、之は資力の豊

富な爲に出た業績でなく、全く胸中たゞ軍人に對する感謝の至情と、偏に國家を思ふ一念から終始せられたものであつて、どれだけ一般郷人に感奮を與へ最善の示範を垂れた事か、洵に感激に堪へないものがある。

四、光榮と表彰

軍事後援の功績は前述の如くで、其の赤誠と行爲とは世人の深く感動する所であつたが、昭和十三年四月二十九日には長くも
皇后陛下御名代閑院若宮妃殿下、静岡縣廳に御成りの砌り、軍事後援に關する拔群の功勞者として特別拜謁を仰せ出だされ、無上の光榮に拜浴したのであつた。

尙同年十月十一日には、支那事變勃發以來、銃後支援に格別貢献した故を以て静岡縣知事より表彰を受け、昭和十五年二月十一日、即ち紀元二千六百年の佳辰に當り、多年軍事を補助して其の貢献洵に尠からざる故を以て、陸軍大臣畑俊六閣下より鄭重なる感謝狀を授與せられた。

第九章 家庭人としての佛

一、家庭に於ける日常

常に精神的生活に重きを置き、贅澤を排して私生活は力めて質實を旨とせられた。兎角業成り財を積んだ者は、自己の欲する儘に華美に流れ、悦樂に耽り易いものであるが、夙に精神修養を重ねた氏は敢へて克己自肅せずとも自然に簡素恭儉の生活に親しまれ、遊樂を希はず美衣美食を求めなかつた。食事は粗末な物でも快く之を攝り特別之といふ嗜好物も無かつたが、強ひて言へば「おはぎ」と洋食とを喜ばれ洋行中の如き際に殊更歡待の心算で和食を供せられても却て洋食を好まれた位であつた。衣服も別に流行を追はず、たゞ清楚を保つことを心懸け、洋袴の折目を常に正しく付け、襟の汚れを毫末も他人に見せず、端正な身だしなみに意を配せられたことは非常に奥床しいこと

である。恭儉己を持する所に紳商の面影が偲ばれる。

不思議にも娛樂といふものは殆んど無く、謠曲、碁、將棋、盆裁、刀劍、書畫、骨董と云つた趣味も持たず、晚酌に暫時を樂しむといふ事もなかつた。世間に如何にも豪酒家の様に思はれたが、それは單に社交上の都合で宴會の席に於て長時間酒の相手をつとめ、而も酔つてしまふことが無かつた爲である。家庭に在つては決して酒を口にする事なく、時に觸れて令息達から奨める場合があつても不要と斷つて之を出さなかつた。而し社交上當然必要な場合は必ず酒席を設けて愉快に應對し、自身も相當に口にせられた。社員と旅行をする際など酒好きの者なれば充分飲ませもし、自分も相手になつて快く其の場を過ごし、社交上の宴席に於ては百人、百五十人の席でも一々懇切に盃を交換され、決して中座する様なことはせず何時の場合でも最後まで勤められ、而も泥酔して態度を崩すといふ事は少しも無かつた。惟ふに氏が家庭で酒を用ひなかつたのは東都遊學時代、基督敎信仰生活に依つて酒は良くないものとの信念を固めた結果、私生活に於ては之を堅く守つたもので、社交上飲酒し

たことは世俗に調和する寛容を持たれて全く超越した信念の上に立たれたものであり、泥中の蓮華の常に潔きを我が心とせられたのであつた。

平素入浴は殊の外好まれて、毎夜如何程晩くとも病氣で無い限り決して缺かしたことは無かつた。温泉も勿論好きではあつたが、用務繁劇の爲に意に委せず、温泉保養等は殆んど行ふ暇が無かつた。

資性頗る寛厚優情に富み容易に人を咎めず、家庭に於ても商店に在つても荒々しく叱り付ける様な事は只の一度も無く、偶々店員の失敗する者があれば諄々として慈父の如く説き聞かせ、心から納得するまで數時間も懇切に諭されたといふ事である。中には随分度を越えた無理な我儘を言ふ者があつても尠しも介意せず、重役達が齒噬みして口惜しがる程の事があつても決して怒氣を現はさなかつた。

謙讓で禮儀正しかつた事は有名で、實るほど頭の下がる稻穂の譬へに似て全く敬服に禁へないものがあつた。來客の履物を揃へてやることも有り、必ず玄關までは見送りもし、汽車に乗る客に對しては驛頭まで態々見送り、自ら

新聞を買つて持たしてあげる等、些細の點まで周到に心を配るので誰も恐縮するのであつた。

非常に多忙のため寸時も大切なので、他人からも社員からも自動車の設置を勧められたが遠慮して、容易に承諾せず、漸く自家用車を購入してからも立たぬ様に特別注意して、人目に立つ所を乗り廻す事を憚られた。世の輕薄者流の振舞とは雲泥の差で、實に美しい心構が偲ばれるのである。

公私の用務が頗る多端で外出勝ちであつたが、家庭に居る時は事變以來必ずラヂオの戦況ニュースを朝のうちに聴かれ、而も如何ほど疲勞して居つても寢た儘では決して聴かれなかつた。そして、出征兵の方々が御苦勞される様子をうかゞふのに寢て居ては申譯が無いと言はれた。夜更けて就寢の際は充分休息される様に慮り、家人が態と朝のラヂオを掛けずに置くこと後でけさはニュースを聴くことを忘れたと言ふほどであつた。

支那事變以來何處へ行くにも汽車は三等に決められ、腰も掛けずに遠路の旅をする事が屢々あつた。これは胸中深く戦地を偲ばれてのことであり家

人が「三等に乗るのですか」と問へば、氣輕に「三等だつて乗るさ」と言はれるのみであつた。

何しても勿忙繁劇の活動を續け、無數の會社に關係し、幾多の公職に携つての事であるから、全く席の温まる暇も無く落付いて家庭に居る機會は極めて稀であつた。

二、家長と家人

資性篤厚、皎潔、圓滿な人格を以て家人に接し、慈愛と寛容とを以て克く一家の融合を圖るが故に、和風門内に溢れ、僕婢に至るまで齊しく其の徳を頌へ、孰れも心から家事に勵んだ。袖摺り合ふも他生の縁で、一旦主人と仰がれ店員と呼ば家僕と使つた以上、如何なる事が有つても決して自ら解雇すると言ひ出したことは無く、色々の事情で重役達からそれを申出る場合があつても容易に承知せず、一生涯を通じて只の一度もあの男は駄目だから辭めさせると言つたことは無かつた。優しく懇切に指導こそすれ家人を叱り飛ばす様な

事は絶対にせず、全く忍耐強く同情心が厚かつたので、雇傭人からすれば洵に得難い良主人であり、家族からすれば實に治めの良い有り難い家長であつた。日頃極めて義理堅く、新聞などで遠方の知人の訃を知れば何は置いても早速必ず之を弔問し、或は係の者に弔問方法を指圖したり、弔辭や手紙を念入りに目を通し、或は加筆添削するといふ眞實さであつた。

非常に孝心深く、常に親恩を念頭に忘れず、随分多忙の裡にも老齡の養母を慰め、朝の挨拶を怠ることなく優情を披瀝して老後を勞り、ひたすら孝養の誠を捧げ、又上京の砌り汽車が袖師の郷を通過する時は必ず車窓から生家の墓所に向つて黙禮を捧げられたといふ事である。

令室昌子夫人に對しては絶対の信頼と純情とを寄せられ、勿忙なる社會活動のために殆んど家庭に不在勝ちであつても後顧の憂ひは更に無く、家庭は一切賢夫人に委ねられ、夫人も亦氏の崇高偉大なる人格に絶対信倚し、只管留守中の責務を全うして家事を督し、商務に膺り、或は諸般に互る處理の遺漏なきを期せられ、その内助の功は實に多大であつた。蓋しこの巨人に配するに

この賢夫人あり、而も信以て不斷の和を成し、和は徳の泉となり力を生んで、そこに家運の興隆と社會に貢献とを齎したものと謂ふべきである。

積善の家には餘慶在りと言はれるが、氏は幸ひ、昌子令夫人との間に四人の男子を儲けられ、揃つて立派な子實に恵まれた。嗣子一郎氏は明治四十三年五月十一日に生れ、静岡中學校を卒へて成城高等學校に學び、更に京都帝國大學經濟學部を卒業して家業に従ひ、父君逝去の前年、静岡高等女學校首席卒業の才媛向坂明子嬢を夫人に迎へられ、次男要二氏は明治四十四年十月二日に生れ、静岡中學校を経て東京商科大學本科を卒業し、貿易商野澤組より濠洲シドニーへ派遣され、嚴父危篤の悲電に接して急遽歸國し、自家の營業に従事することになつた。三男清司氏は大正三年三月二十六日に生れ、静岡中學校を経て青山學院高等商業學部を卒業し、清水精機株式會社の常務取締役となり、四男辰衛氏は當時静岡中學校第五學年に在學勉勵中であつた。

氏は令息達の教養に對し飽くまで個性を尊重して、その純眞明朗に自然の伸張を楽しみ、無爲的感化を重視されて隨所の薰化に周到細心の意を注ぎ、苟

も子息の教育に關する限り忙中尙且つ片時も忘却することは無かつた。平素禮法が一切の根基となる信條から、率先自ら禮儀を正しくして好範を示すと共に、この點は家人に對して殊更に強調された。或時二男要二氏を伴ひ北海道に旅行した折、所要の客と面接されたが、要二氏が餘り丁寧な挨拶をしなかつたところ、退出後に「あんな粗末な禮ではいけない、もつと禮儀正しくするがよい、禮儀は心さへあればよいと考へるのは間違つてゐる、形も亦整つて居なくてはいけない」と懇切に誨へられた。又嗣子一郎氏を同伴して渡米された時、華府で領事と面談中、一郎氏は扇子を持つて居なかつたので、暑氣の烈しさの餘り、何氣なくハンカチを扇子代用にして煽いで居たところ、其の場を立つた後で、それは非禮無作法であると深く注意を與へられたといふ事である。令息達に對しては文字通りの慈父であつて、心からよく愛撫し、平素何事も無理押し付けがましい事は尠しも無く、若し不本意の事があれば諄々と深切に説得され、克く個性を見抜いて指導された。或日所要の爲、長子を伴ひ上京されたが、都合で子息は獨り用向きの所へ出掛けることになり、バスに乗つて

行かうとすると要件に間に合はなければ悪い、大切な場合は乗物等の事をあれこれ考へるでは無い」と言つて、早速タクシーで行く様に命ぜられた事がある。又或時次子要二氏に對し、「お前は少し金遣ひが荒い様だ、評判も大分よい様だが金を使ふからかも知れない、それも悪い事では無いが、若い頃は氣を付けた方がよいだらう」と教へられたことがあつた。バスではいけない、タクシーを呼んで行けと言はれる一方には、金遣ひを注意したりすることを彼此相觀すれば、いかにも即應微妙の教育態度を察知することが出来る。夜半に歸邸の際でも令息達から話があれば何時でも快く談話を交され三更に及ぶとさへあつたが、時には聽いて居ながら眠つて居るので令息達が遠慮して話を中絶すると却て、それからどうしたのかと問ひ返されたといふ事である。如何なる疲勞も忘れて令息達の良き話相手になる、優しい慈父としての姿が偲ばれて奥床しい限りである。

晩年になつて特に皆の子息に話された事は、兄弟仲善く和合してやつて行つて呉れといふことで、毛利元就の弓箭の遺訓にも似て令息達の心肝に徹す

るものがあつたに違ひ無い。されば四子克く和衷協力して父君の志を継ぎ、その和氣藹々たる姿こそ、氏が道山に歸る日最大の安心を覺えられた事と信ずるのである。

惟ふに家庭人としての氏は、家人より心から敬慕される聰明な家長であり、深き理解と溫情に満ちた慈父であつて、常に率先垂範よく齊家の實を擧げられたのであつた。

第十章 社會人としての素描

一、恭敬謙讓

世俗とかく貴顯に至つて布素の當時を忘れ、志操を變へる習ひであるが氏に於ては即ち動けば必ず禮を思ひ、行へば堅く義を踏み、利に依つて苟くも心を曲げず、處世飽くまで恭敬謙讓の美德を貫き、その力を誇り地位を衒ひ、人に差別を設ける様なことは聊かも無く、居常恭儉己を持ち、五關近く閉して徳の遠盈を慮り、謙謹奢侈を好まず、遜讓人に接して禮辭を篤くし、未だ嘗て驕慢の色を見せたことは無かつた。

途上知人に會へば進んで先に挨拶を述べ、車中であれば必ず脱帽會釋して通過し、官公衛等に行く時は極めて下役の者にも頗る慇懃に挨拶してその勞を謝し、引續く來訪者に對しては匆忙の裡にも鄭重に應待して充分來意を満

たさせ、貴賤貧富に依つて態度を變へる様な事は毛頭も無かつた。自動車を呼んで乗る場合も必ず「頼みます」と言ひ、降りる時には「御苦勞でした」と謝意を表するなど情味津々たるものがあつた。狭い道路を通行中、方向變換をしたる摺れ違つたりする爲に、他の自動車が讓つて呉れた場合に運轉手が「有り難う」と言ふ傍から、必ず自身も愛想よく「やあどうも有り難う」と禮をのべられ、又同一の方向に行く既知の人を見れば「御一緒に如何です」と同乗を勧められ、婦人達の場合は先に乗車を促して己を後にし、同席者の多い時は「外國では助手席が上席だから一向平氣だ」と冗談を言ひながら態と運轉臺に乗られた。道を歩きながら仕事をして居る人に聲を掛けて深切な言葉を與へたり、會合や宴會で何人にも漏れなく一々挨拶して廻つたり、どこまでも謙遜な態度に終始し、清水の鈴與だなどと云ふ顔を見せたことは尠しも無く、いつでも氏に接した者は却て恐縮を覺え、謙謹な奥ゆかしい風格に敬仰の念を起し、誰でも心から尊信するのであつた。